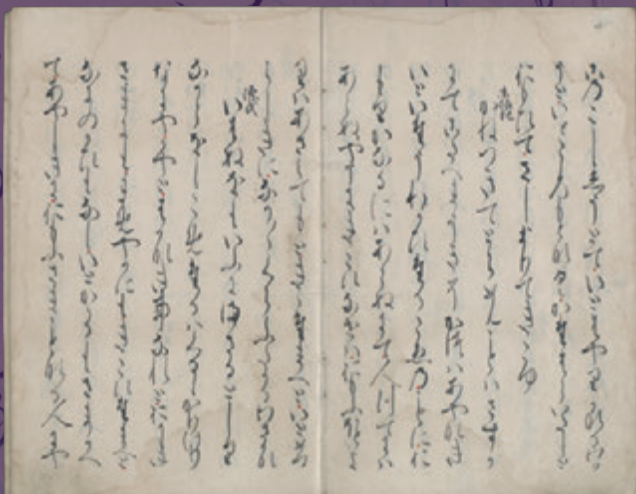


第26回慶應義塾図書館貴重書展示会

慶應義塾の王朝物語 源氏物語を中心として



第26回慶應義塾図書館貴重書展示会

慶應義塾の王朝物語 源氏物語を中心として

会期：2014年10月22日～10月28日

会場：丸善・日本橋店 3 階ギャラリー

主催：慶應義塾図書館 協賛：丸善株式会社

ごあいさつ

本年度26回を迎える慶應義塾図書館貴重書展示会は、国内外の稀覯書や古典籍などの貴重書を中心に、義塾図書館のユニークな蔵書の数々を広く学外の皆様にご覧いただく機会として、慶應義塾大学教員と図書館員との共同により毎回趣向を凝らした企画をお届けしてまいりました。

今回は「慶應義塾の王朝物語」と題して、義塾図書館が所蔵する資料の中から『源氏物語』を中心に王朝（平安）時代に成立した物語の絵入り本や注釈書、梗概書等、様々な形態の資料を紹介します。日本文学史において平安時代の文学は中古文学と呼ばれ、仮名文の発達に伴って女房階層がその創作の中心となった貴族的文学です。「もののあわれ」を主潮とする優美な情趣を持つ文学として、『伊勢物語』『源氏物語』等の物語文学のほかにも『古今和歌集』等の和歌文学、『土佐日記』『蜻蛉日記』等の日記文学、随筆の『枕草子』や、歴史物語・説話文学等、後世の日本人の美意識に大きな影響を与えた作品が多く生まれました。

本展示会の企画・監修をお引き受けくださった慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の佐々木孝浩教授からは、世界的な古典文学である『源氏物語』は、創作を「虚構（フィクション）」すなわち「嘘」とみなす仏教的な考え方からは後ろめたい作品であり、作者の紫式部はそれを因として地獄に堕ちたと考えられたという説を伺いました。改めて今回展示される資料を振り返りますと、『源氏物語』という題名もなく「桐壺」などの帖名のみが記されている資料が多いこと、作者名も書かれていないこと等に気づきます。そのような後ろめたいとされた虚構を扱った物語がどのように受容されていったのか。本展示会では『竹取物語』から『伊勢物語』『大和物語』、そして『源氏物語』への流れを辿りながら、平安時代の物語文学の多様性やこれらの古典籍の形態、手蹟、挿絵の美しさに注目します。ご覧いただく皆様にもおなじみの王朝物語をご一緒にお楽しみください。

なお、今回も丸善株式会社のご協力をいただいて丸善日本橋店ギャラリーにて開催させていただくこととなりました。この場を借りて関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

2014年10月

慶應義塾図書館長
田村 俊作

目 次

ごあいさつ.....	慶應義塾図書館長	田村 俊作	
展示にあたって.....	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授	佐々木 孝浩	
展示概説.....			1
図版解説.....			7
表紙一覧.....			53
出品リスト.....			57

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授 佐々木孝浩によるギャラリートーク

10月25日（土）・10月26日（日） 各14：00－

展示にあたって

慶應義塾図書館貴重書展示会の手伝いをさせていただくのは2度目になります。2007年の第20回「義塾図書館を読む～和・漢・洋の貴重書から～」展では和書を担当し、その図録の前書で、義塾図書館の和書の貴重書の特徴について、「注釈書あるいは古典の研究書が多くて、古典の本文のみのものは少ない」と述べました。実は今回のテーマである「王朝物語」の本文は、その一番弱い部分なのです。それをあえて選んだ理由は、一昨年度に開館100年を記念して『源氏物語絵巻（絵源氏）』が、そして昨年度にも『源氏物語』『末摘花』帖の鎌倉時代写本が、新たに貴重書コレクションに加わったからに他なりません。

室町後期から江戸前期に制作された絵入り本である「奈良絵本・絵巻」は、義塾図書館貴重書の最も充実した分野ですが、偶然か必然か、王朝物語の絵入り写本は明らかに手薄でした。ですから『源氏物語絵巻』の増加は、記念の年にふさわしい出来事であったと言えます。さらにまた、文学部の石川透教授を代表とし、私も加わった、平成21～25年度の「15～17世紀における絵入り本の世界的比較研究の基盤形成」プロジェクトを通じて、優れた絵入り本が纏まって義塾図書館の蔵書となりましたが、それらに期せずして竹取・伊勢・源氏の各物語の絵入り本が含まれていたのも、企画案決定の追い風となりました。

今回の展示のもう1つの中心的な存在である「末摘花」帖は、僅か1帖のみではありますが、本文はもとより形態面においても研究的価値が非常に高いものです。また展示候補を探す過程で、未指定の本の中から、貴重書に匹敵する価値のある資料を見いだすこともできました。不得意分野の解消とまではいきませんが、着実にその方向に進んでいるのです。大学図書館のコレクションは成長を続けていくものですから、その方向性を考える上でも、こうした展示会を開催する意義があると言えるでしょう。

もちろん開催の主目的が、コレクションを学外にも広く公開して、貴重書を所蔵する意味や、その学術上の価値などを、多くの方々にご理解いただくことにあることは言うまでもありません。なんと言っても、「王朝物語」は日本古典の花形ですから、その書物も美しく仕立てられています。本図録の解説で各展示資料の見所などを判りやすく説明しておりますので、それを手引きとして理屈抜きで楽しんでくださることを願っております。

末筆ながら、今回の企画をお認めくださり、実現にご協力くださった多くの方々、そして会場にわざわざおいでくださった皆さまにも、心より御礼を申し上げます。

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授

佐々木 孝浩

展示概説

はじめに：「王朝物語」の範疇

「王朝物語」という言葉は、範囲が曖昧な用語ですが、本展示会においては、平安時代の仮名書きの物語で、記録性の強い歴史物語を除いたものと定義したいと思います。具体的な作品としては、伝奇物語に分類される『竹取物語』、歌物語に分類される『伊勢物語』と『大和物語』、作り物語に分類される『源氏物語』と『狭衣物語』となります。

平安時代の物語は他にもありますが、本展示会の対象となる作品は何れも著名であり、古来より愛読されてきたことは、現存する伝本数によっても明らかです。実は物語の古写本の現存数は、和歌の参考書として読まれたかどうかで決まります。和歌や連歌を詠んだり解釈したりするのに必要とされた物語は、必然的に多く書写され大切に保存されたのです。『伊勢物語』『源氏物語』の圧倒的な伝本の多さは、優れた作品ということだけではなく、歌人・連歌師の需要の高さを物語っています。『大和物語』『狭衣物語』の伝本数が是に次ぎ、『竹取物語』はかなり見劣りするという事実が、何を意味するかは明らかでしょう。

物語の生存競争：『風葉和歌集』と『古物語目録』

紫式部が『源氏物語』の作者とされ、また「女房文学」という言葉もあるように、平安時代の物語は、高貴な人々に仕えた女房達が、女主人の教育や娯楽の為に書き上げたものが多かったものと考えられます。そうした創作活動がいかに活発であったかが窺える資料が、**風葉和歌集**（展示番号1）と**古物語目録**（展示番号2）です。前者では200を超える作品名が確認でき、後者は問題も多くありますが約450作がリストアップされています。物語がどれほど多くの人々を魅了していたかが判る数でしょう。前者に見える作品で現在まで伝わったのは10分の1強です。多い数とも思えますが、人に知られぬままに終わった作品も多かったであろうことを考えると、現存する物語は、いわば苛烈な生存競争を勝ち抜いた精鋭ばかりと言えるのです。その生き抜く力となったのが、和歌との関係であったことは先に触れたとおりです。

出で来はじめの祖（おや）：『竹取物語』

『源氏物語』「絵合」の巻で、「物語の出で来はじめの祖」とされた『竹取物語』は、主人公が公家どころか通常の人でもない点で、「王朝物語」としては異質であり、室町時代頃から流行する「御伽草子」（室町時代物語）に近い存在と言えます。数本の室町末期写本が知られていますが、それより古いものは、南北朝頃の写とされる古筆切が確認されるにすぎません。江戸初期に刊行されてから急速に広まった作品であり、その頃から絵入り写本も数多く制作されています。**竹取物語屏風**（展示番号3）は、現在知られるものの中で最も挿絵数が多い絵巻を、屏風に仕立て直したものです。江戸前期の典型的な豪華版絵巻と言えるもので、『伊勢物語』や『源氏物語』の絵巻などと、挿絵の様式を見比べてみるのも楽しいのではないのでしょうか。

歌集か物語か：『伊勢物語』と『大和物語』

歌物語に分類される『伊勢物語』と『大和物語』は、歌を含む短話の集成であり、實在

人物が登場するなど、『源氏物語』や『狭衣物語』などの作り物語とは性格が大きく異なります。また同じ歌物語でも『伊勢物語』は在原業平と考えられる主人公がいるのに対し、『大和物語』には特定の主人公は存在しません。業平の一代記としても読める点で、『伊勢物語』は『大和物語』よりも物語性が強いと言えるでしょう。2点の**伊勢物語**（展示番号4、5）写本の内、展示番号4は枡形（六半本）の綴葉装で、鎌倉室町期の典型的な姿と言えるものです。展示番号5は表紙や大きさに凝った、いかにも江戸時代的な様子の本です。

『伊勢物語』には鎌倉時代の絵巻が存在しています。**伊勢物語小絵巻断簡**（展示番号6）は江戸前期17世紀のものですが、室町時代の構図を伝えるものとして注目できます。**伊勢物語画帖**（展示番号7）はやはり17世紀の絵入り袋綴本を折帖に仕立て直したもので、その極彩色の挿絵は、江戸期の主流となった古活字版「嵯峨本伊勢物語」の構図ともやや異なるものです。同じ物語の絵入り本でも、両者は挿絵の系統が異なっているのです。

対照的に『大和物語』の絵入り本はかなり珍しいと言えます。今回展示した**大和物語**（展示番号8、9）は本文のみのものです。展示番号8の後半部は展示番号9よりも半世紀以上書写が古いものですが、9の方が紙も大きく立派に見えるのは、前者が連歌師、後者が公家の手になることによると思われます。

創作の罪と紫式部：『宝物集』その他

王朝物語の代表が『源氏物語』であることは言うまでもありません。成立当初から熱狂的な読者を獲得した評判の物語でしたが、暗い噂が付きまとっていました。紫式部は『源氏物語』を書いた為に地獄に堕ちたというのです。その話を記録しているのが**宝物集**（展示番号10）です。創作は見方によっては虚偽であり、物語を書くことは仏教的に罪を犯す行為であったのです。創作として素晴らしく、大長編でもある『源氏物語』は、物語の中でも最も罪深い存在であったわけです。

それにしても紫式部は何故『源氏物語』を書くことができたのでしょうか？文才があったことは勿論ですが、彼女が歌人であったことは主要な理由の1つであると思われます。『源氏物語』には800首近い和歌が含まれるのみならず、既存の歌を踏まえた表現も数多く存在しており、和歌にかなり通じていなければその執筆は不可能です。また和歌は恋を主要素材の1つとし、様々な条件下の恋の状況をテーマとして詠作することが要求されます。恋の歌1首1首の背後には短編の恋愛話が付随していると言えるのであり、恋物語に発展する可能性を秘めているのです。**後拾遺和歌抄**（展示番号11）と**小倉山百人一首**（展示番号12）は紫式部が優れた歌人であったことを証明する資料です。

3種の『源氏物語』：写本と古筆切

『源氏物語』は多くの人に愛され、競うように書写され広まったはずですが、平安時代のものは国宝の『源氏物語絵巻』しか存在していません。平安末には本毎に本文が微妙に異なっていたらしいことが、現存する鎌倉時代写本の有様から想像できます。物語の社会的地位が低かったことも、書写が厳密でなかったり、安易に手が加えられることの原因となったかもしれません。ストーリーが変わる訳ではありませんが、意味が通らない箇所があるのは困りますし、和歌の参考書として利用するにも問題が生じます。そこで鎌倉時代に校訂作業によって本文を整えようとする努力が払われました。その様にして生まれ、写し広まって群をなした系統が2種あります。主として室町時代以降に良く用いられた「定家本（青表

紙本)」と、室町初期頃まで良く利用された「河内本」です。そして1点毎に本文が微妙に異なり群をなさないものを、纏めて「別本」と呼んでいます。

本展示会では、『源氏物語』の写本と断簡を6点並べてあります。この内の唯一の揃本である展示番号13と、展示番号14、15の断簡が「定家本」系統に属するもので、「末摘花」帖（展示番号16）と展示番号17の断簡が「河内本」系統、そして展示番号18の断簡が「別本」に整理できるものです。

日本の古典文学作品は主に3種の装訂の本に保存されました。展示番号3と6の本来の形である卷子本（巻物）と、伊勢物語（展示番号4）や後拾遺和歌抄（展示番号11）のように紙の両面を使用する綴葉装（列帖装）、そして風葉集（展示番号1）や伊勢物語（展示番号7）のように、紙を筒状にして表面のみを使用する袋綴がそれです。この3種は卷子装・綴葉装・袋綴の順に中国から伝わり、書物としての格もこの順で高かったと考えられます。『源氏物語』は挿絵のない本文だけでは原則的に卷子装で制作されることはありませんでしたので、ここに並ぶ6点はおそらく全て綴葉装です。袋綴は時代が下るほど使用頻度が高くなるので、ここにはないの不思議ではありません。綴葉装には長方形の「四半本」と枡形の「六半本」の2種がありますが、鎌倉時代の『源氏物語』の四半本は珍しいものです。「四半本」と「六半本」では前者の方が格が高と考えられ、展示番号15、16はその点でも注目できるものです。

版本の『源氏物語』：「素源氏（すげんじ）」と「絵入源氏」

近世初期に始まった活字印刷の時代でも『源氏物語』は人気作で、分量が多いにも拘わらず、約半世紀の間に少なくとも5種が出版されています。版本を用いた整版印刷の時代になっても、様々な形態や内容で刊行し続けられました。ここでは17世紀に出版されたものの中から4種を展示しました。展示番号19は「素源氏」とも呼ばれる本文だけのシンプルなもので、表紙や大きさ、書体などに江戸初期の雰囲気濃厚です。商品であった版本は、付加価値を高める工夫がなされましたが、その最も一般的な方法が挿絵を入れることでした。展示番号20はその最初の版のもので、注釈や年表・系図等もセットになっています。展示番号21、22はこれを真似て異なる判型で刊行されたもので、同じ場面の挿絵を見比べられるようにしてあります。ヒットにあやかりとうるのは何時の時代でも変わりませんね。

梗概本という存在：「源氏大鏡」を中心に

『源氏物語』は長編なので、全部読み通すのは大変な事です。「須磨源氏」という諺をご存じの方も多いでしょう。それでも和歌や連歌を詠む為には、その知識が必要になります。こうしたことから生まれたのが粗筋を纏めた梗概本で、鎌倉時代に抄出的なものが現れ始め、連歌が流行した室町時代を中心として様々なものが作成されました。その中でも主要なものが、「源氏小鏡」と「源氏大鏡」と総称される2種で、「小鏡」は作中歌は主要なものに限り、「大鏡」は全歌を収載する点に特徴があります。「小鏡」の方が広く流布し、古写本も多く、古活字版や整版も複数種が存在しています。この展示では「小鏡」より珍しい「源氏大鏡」に属する、写本の源氏袖鏡（展示番号23）、三帖源氏（展示番号24）、版本の源氏物語大略（展示番号25）と、「源氏大鏡」から派生した、梗概書と注釈書の性格を併せ持つ版本の源氏ます鏡（展示番号26）、それから江戸時代を代表する梗概書である源語忍草の版本（展示番号27）を出品しました。

注釈書の世界：『紫明抄』から『岷江入楚』まで

作品成立時には当たり前だった詞や文物も、時代が移ると次第に判らなくなります。また和歌の参考書となる古典作品は、和歌の教育システムの中にその解釈的な学問も組み込まれていましたから、『古今和歌集』は当然のこととして、『伊勢物語』や『源氏物語』でも多くの注釈書が作成されました。注釈書の種類と数も、本文の伝本数と同様に、その作品が広義の歌書として尊重されたかどうかにより比例すると言えます。

『源氏物語』の注釈書も数多く存在していますが、今回は注釈書の充実した義塾図書館のコレクションから、「河内本」に対する**紫明抄**（展示番号28）、**源氏和秘抄**（展示番号29）、**源語秘訣抄**（展示番号30）、「定家本（青表紙本）」に対する**〔源氏物語古注〕**（展示番号31）、**源氏物語抄**（展示番号32）、**岷江入楚**（展示番号33）を選んで展示しました。この内、展示番号30、32は版本です。**光源氏物語系図**（展示番号34）は登場人物を系図形式で整理したのですが、広義の注釈書と言える性格を有しています。

変種の絵入り本：『絵源氏』と『源氏物語〔抄出〕』

先にも記したように、『源氏物語』はその社会的な地位故に、基本的に本文単独では卷子装で制作されることはありませんでした。しかし挿絵があれば卷子装で制作されました。これは、絵は卷子装に保存するものであるという故実が優先されたためと思われます。それが「絵巻」で、平安時代制作の国宝『源氏物語絵巻』はその代表作です。**絵源氏**（展示番号35）は形態的には絵巻ですが、詞は本文の抜粋でストーリー性を有しておらず、色紙などの画帖に近い性質のものと言えます。

日本の書物は挿絵と卷子の関係が密であった為に、冊子本に挿絵が入るようになるのは随分遅れて室町後期（16世紀）になってからのことでした。江戸時代に始まる商業出版では挿絵が入るのも普通になり、江戸前期には彩色挿絵入り冊子写本が流行と言って良いほどに数多く制作されました。ただし絵入り冊子本は袋綴のものが先に成立し、綴葉装のものはこれに遅れて作られました。**源氏物語〔抄出〕**（展示番号36）は絵入り綴葉装が成立した後に、これを非常に珍しい極小サイズで制作したものなのです。

第3の物語：『狭衣物語』

『伊勢物語』・『源氏物語』に続く和歌の参考書であった物語が『狭衣物語』です。その為もあり古写本も数多く現存しています。ところが、伊勢・源氏の両物語と異なり、鎌倉時代に本文の整定が行われなかった為に、有力な系統が存在しないままに江戸時代を迎えました。古活字版として複数種が刊行されたのも伊勢・源氏と同様で、以後はこの版本の本文が流布本としての地位を占めるようになります。整版本の刊行にあたって挿絵が入り、系図や注釈とセットで制作されるあり方も、『源氏物語』と一緒にです。「絵入源氏」版本との比較の為に、版本の**狭衣（附狭衣下紐・狭衣系図）**（展示番号37）を展示しました。また『狭衣物語』には『源氏物語系図』を意識して制作されたと思われる系図も存在しています。比較的に書写が古く、造本からも素性が良いと考えられる、折本の**さ衣系図**（展示番号38）を展示します。折本は卷子装から派生したと考えられる装訂で、通常は文学作品が保存されることはありませんでしたが、系図は卷子や折本で制作されるものでしたので、物語の系図でも折本で作成されています。折本は卷子装と共に一度に多くの分量を見ることが出来る点でも系図向きの装訂と言えます。

【主要参考文献】

伊井春樹編『源氏物語・注釈書・享受史事典』（東京堂出版、2001）

佐々木孝浩「絵巻物と絵草子：挿絵と装訂の関係について」（『斯道文庫論集』45、2010）

*解説に関する注記：『伊勢物語』と『源氏物語』について、しばしば「伊勢」・「源氏」と略称を用いています。「参考文献」は膨大に存していますので、特に関係の深いものに限って掲載したものであることを御了解ください。

1. 風葉和歌集 20巻存巻11 伝池田綱政筆 [江戸前期] 写 1冊

朽葉黄色地牡丹唐草文金欄表紙 (19.3×15.8cm) 題簽なし 見返し鳥の子色地金砂子雲霞文平絹 内題「風葉和歌集巻第十一」 料紙鳥の子色地淡彩花鳥等文平絹 半葉12行前後・歌2行書・字高約15.2cm 古い漆塗桐箱 印記:「花房子爵家/寄贈図書之印/昭和十一年十一月/慶應義塾図書館」

[56X@84@1]



『風葉和歌集 (ふうようわかしゅう)』は、鎌倉初期までに成立した200余の物語から作中歌を抜き出し、詠歌状況を詞書にまとめ、作中人物を作者として、勅撰和歌集の形式に倣って部類編纂した歌集で、文永8年(1271)の序文がある。本来20巻だが巻13・14の一部と末尾2巻が失われている。撰歌された物語で現存するのは僅か24作であり、物語研究上の価値は極めて高い。成立期に近い書写の古筆切(伝後伏見院筆桂切)があるが、伝本は多くない。

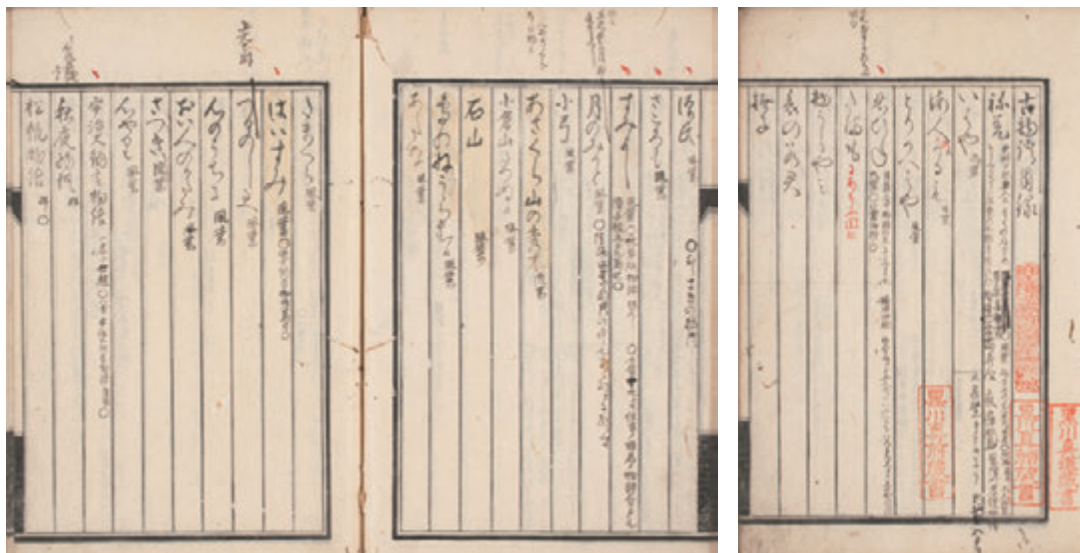
本書は箱内の貼紙に、「風葉和歌集 一冊/伊予守様綱政公御筆/御絵哥トモ御同筆也」とある。岡山藩主池田綱政(いけだつなまさ・1638~1714)は、父光政(みつまさ)譲りの鎌倉時代風の筆跡で、父共々多くの古典作品を書写しており、貼紙の信頼度は高い。錯簡のある本を写したらしく、歌順に一部混乱があるが欠脱はない。巻11のみながら、華麗な絵絹を用いた造本は大名文化を伝える資料としても注目できる。寄贈主の花房子爵家は旧岡山藩士の家柄である。

【参考文献】中野莊次・藤井隆『校本風葉和歌集(増訂版)』(友山文庫、1970)

2. 古物語目録 清水浜臣自筆稿本 [江戸後期] 写 1冊

後補砥粉色地藍色州浜形型抜漉文表紙(24.0×16.6cm) 左肩銀小切箔散し題簽 外題「古話篇目」(本文別筆)・現状扉の本文共紙原表紙中央に「古話篇目」(本文同筆力)とあり 四周双辺有界10行単黒魚尾大黒口刷罫紙(内径18.4×12.6cm) 印記:「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」「黒川真前蔵書」・「天下無雙」(寺田望南)・「月明荘」(反町茂雄) 横山重旧蔵

[110X@230@1]



国学者の清水浜臣(しみずはまおみ・1776～1824)が編纂した古物語の書名目録で孤本である。山岡浚明(やまおかまつあけ・1726～1780)編『古ものがたり目録』に見える236部の倍近い約450点を著録する。典拠の注記には「風葉」とあるものが多く、『風葉和歌集』の重要性が確認できる。

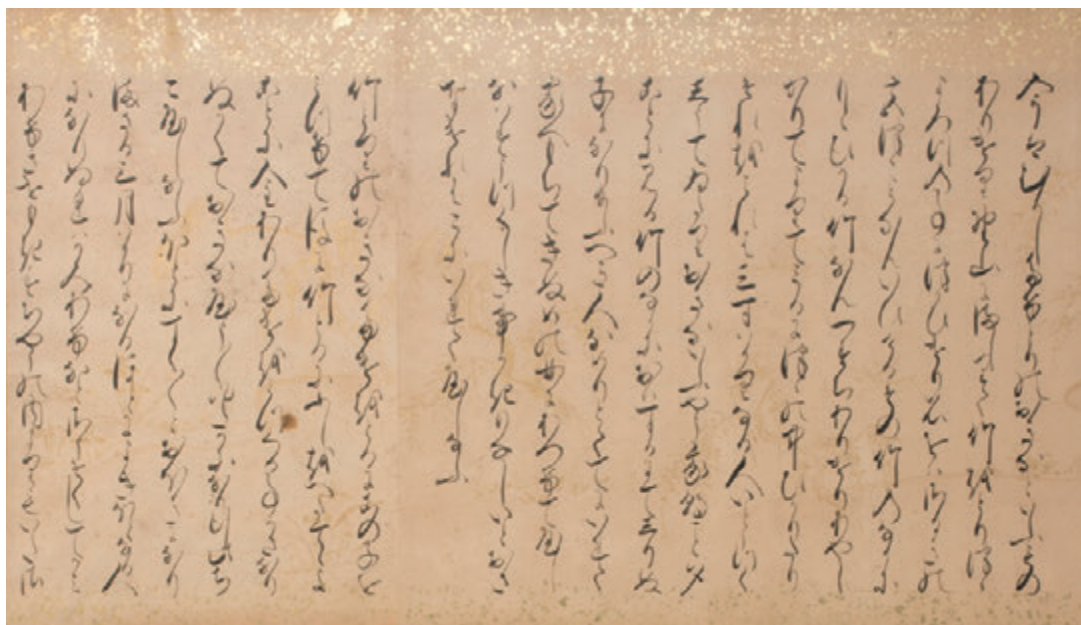
表紙右肩と扉裏に存する「[清水] 浜臣自筆稿本」との朱筆は、浜臣と親交があり、『古物語類字抄』を編じた国学者黒川春村(くろかわはるむら・1799～1866)の筆跡であると考えられる。蔵書印の黒川真頼(まより)は春村養子で東京帝国大学教授。真道(まみち)・真前(まさき)はその子と孫である。歴代が蒐集した黒川文庫8万冊は、関東大震災で3分の2が焼失、残りは大学図書館を中心に分蔵されている。義塾図書館には点数は少ないながら、『不忍文庫書目録』他の蔵書目録等が所蔵されている。

【参考文献】小川陽子「物語目録の生成と展開—中世王朝物語享受文化圏の解明に向けて」(『中世王朝物語の新研究』新典社、2007)

3. 竹取物語屏風 [江戸前期] 写 絵巻断簡貼込 6曲1双

1隻 (175×368cm) 絵巻料紙鳥の子 1紙 (32.1×56.0cm)・字高約26.7cm 本文25葉 (右隻12・左隻13) 挿絵26図 (右隻大10・小4、左隻大10・小2)

[133X@138@2]
(絵入り本プロジェクト)





日本最古の物語の『竹取物語』は、ファンタジックなストーリーと挿絵の相性が良かったのか、江戸時代以後に絵入り本が数多く制作されている。江戸前期制作の豪華な奈良絵本絵巻類は、後に切断して屏風に仕立てられることが多く、本屏風もその1例である。詞書部分の上下の金砂子は、豪華さを増す為に屏風に仕立てた際に後蒔きしたものと思われる。

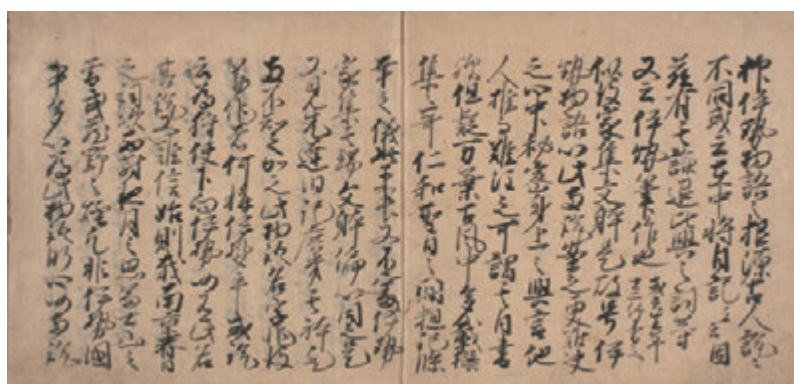
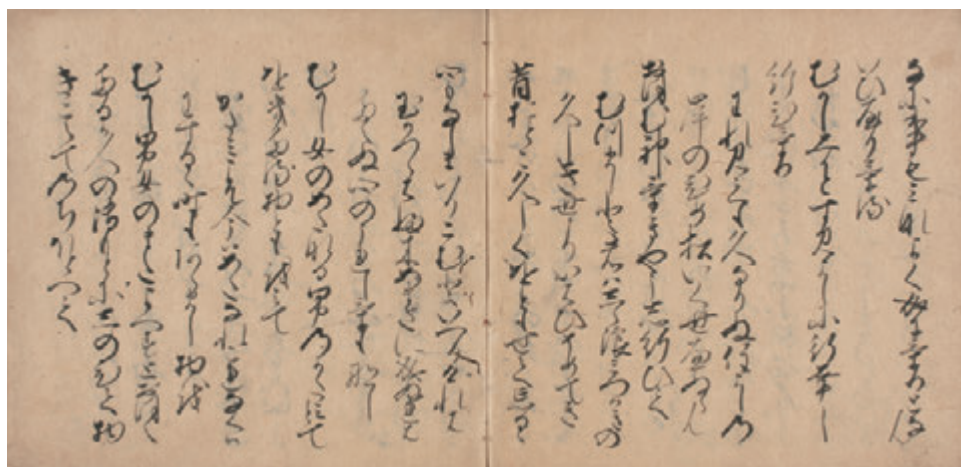
竹取絵巻は3軸で15図前後の挿絵を有するのが一般的だが、本屏風の挿絵は、料紙1枚と半分のもを併せて26図と、現在確認できる範囲で最大である。右隻の僧侶の図などは他の絵巻に見えない構図である。本文は金泥下絵の料紙に、専門の書き手と思われる筆跡で優美に清書されており、挿絵も相当力量のある絵師のものと判断される。人物の顔が白塗りで個性的に描かれているのが特徴と言えようか。本文は当時通行の版本に近く、多くの奈良絵本と同様に版本写しの可能性が高い。挿絵を優先して貼った為、本文は全体の3分の2弱の部分まで順に貼ったところで終わっている。

【参考文献】 上原作和・安藤徹・外山敦子編『かぐや姫と絵巻の世界』（武蔵野書院、2012）

4. 伊勢物語 伝飛鳥井雅康筆 [室町中期] 写 綴葉装 1帖

後補萌黄色靈芝雲文等金欄表紙 (18.2×18.7cm) 中央華唐草文唐紙地金泥雲霞文題簽 外題「□□物語」(伝持明院基時筆) 見返し金銀切箔砂子雲霞文 料紙斐紙 半葉10行・字高約15.0cm 川勝宗久極札 古い桐箱

[132X@180@1]



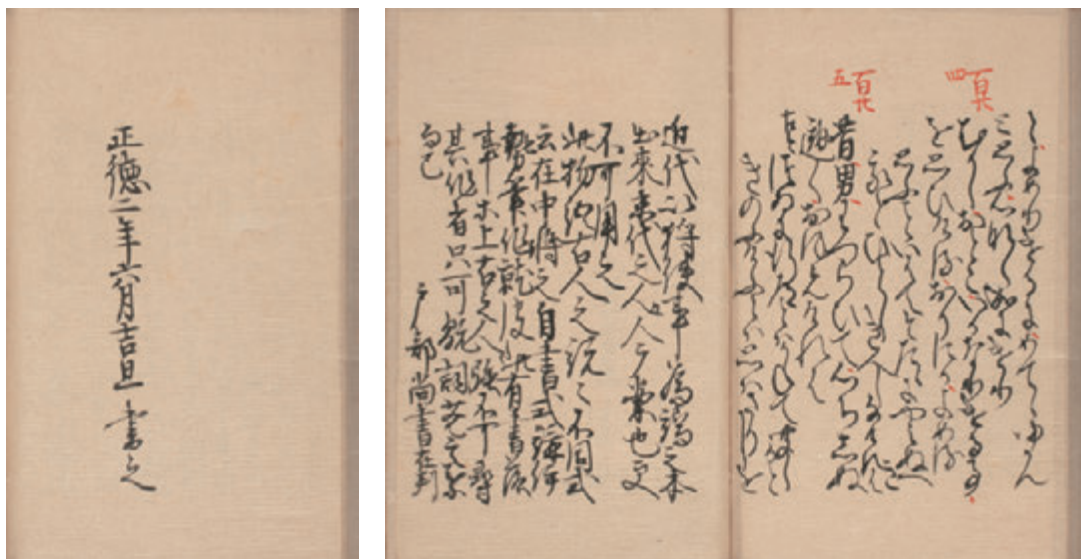
『伊勢物語』は『源氏物語』と並んで古写本の多い物語だが、その殆どが鎌倉初期の藤原定家が整定した所謂「定家本」に属するものである。定家本は125段(話)・和歌209首で共通するが、書写時期の違いで更に分類可能である。伝本が多いのは、定家奥書が「抑伊勢物語根源…」で始まる「根源本」、「天福二年正月廿日己…」で始まる「天福本」、「合多本所用捨也…」で始まる「武田本」で、少ないものに建仁2年・承久3年・寛喜3年の奥書本がある。複数の定家奥書を有するものや奥書のない伝本も多く、完全な整理は難しい。

本書は「根源本」の1本で、定家以外の奥書はない。川勝宗久(かわかつそうきゅう)の極札は本文を飛鳥井雅康(あすかいまさやす・1436~1509)、外題を持明院基時(じみょういんもととき・1635~1704)の筆と鑑定する。雅康は和歌と蹴鞠の師範にして、書流「二楽軒流」の祖とされる能書でもあり、本書もその書風を濃厚に示すが、筆力がやや弱く子孫か門弟筆の可能性がある。外題は文字が摩滅しているが、基時筆と見てよいか。造本や筆跡など、室町時代『伊勢物語』写本の典型の1つと評することができるものであろう。

5. 伊勢物語 2巻 正徳2年(1712)写 2冊

白茶色地金泥竹(上) 籬秋草(下) 文金砂子散し表紙(11.5×8.0cm) 中央雲母引地金泥小松文題簽 外題「いせ物語上(下)」(本文同筆) 料紙三桎薄様 半葉10行・字高約7.8cm 朱章段数・読点あり

[225@187@2]



本書の本奥書には、書き出しに「合多本所用捨也可備証本」の一文がないものの、「近代以狩使事…」以下が一致し、定家「武田本」に属する1本であると考えられる。「正徳二年六月吉日書之」との書写奥書に署名はない。能筆とは評しがたいものの豪華な表紙を有しており、藩主などの貴人の筆になる可能性を有している。伊勢写本は通常1冊(帖)だが、本書が2冊なのは版本に倣ったと考えられ、本奥書の一致や集付の有様などから、慶安4年(1651)刊本を書写した可能性がある。このような特小本は世界中に存在するが、日本でも平安時代以来の伝統があり、本書もその系譜上に位置づけられるものである。

6. 伊勢物語小絵巻断簡 [江戸前期] 写 84紙

料紙厚手楮打紙（高さ16.3cm）字高約13.5cm 金銀泥彩色画（42図）

[133X@143@1]
(絵入り本プロジェクト)



(初段・2段の絵)



(3段の絵)



(6段の絵)



(9段の絵)



(101段の絵)

『伊勢物語』は絵画化の対象としても人気があり、鎌倉時代から江戸時代に至るまでの数多くの絵巻や絵入り冊子本が現存している。

本資料は、分割して屏風に貼り込まれていた絵巻を近時に剥がしたもので、通常の半分の高さである「小絵（こえ）（巻）」に属するものである。小絵は室町時代に流行した形式で、江戸時代になると同じ高さの横型冊子奈良絵本に取って代わられた。本資料は奈良絵本隆盛期に作られた小絵として珍しいものである。稚拙で老齡を思わせる震えた手による本文は、定家本に属し、幸いなことにほぼ完存している。挿絵は、シーボルト旧蔵で大英図書館蔵の室町後期写の小絵（現状折本）と構図を同じくし、3図の欠落が想定できると共に、大英本の欠落部復元の資料ともなる。彩色や細部の表現には違いがあり、本資料の方が濃彩で描写が細かく、特に水流や金泥を用いた御簾の細かな描き方に特徴がある。「伊勢物語小絵」の考察に大英図書館本とセットで利用されるべきものであろう。

【参考文献】羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成』（角川学芸出版、2007）

7. 伊勢物語画帖 伝里村昌陸筆・伝長谷川等哲画 [江戸前期]写 文政4年(1821)

識語 袋綴改装折帖 1帖

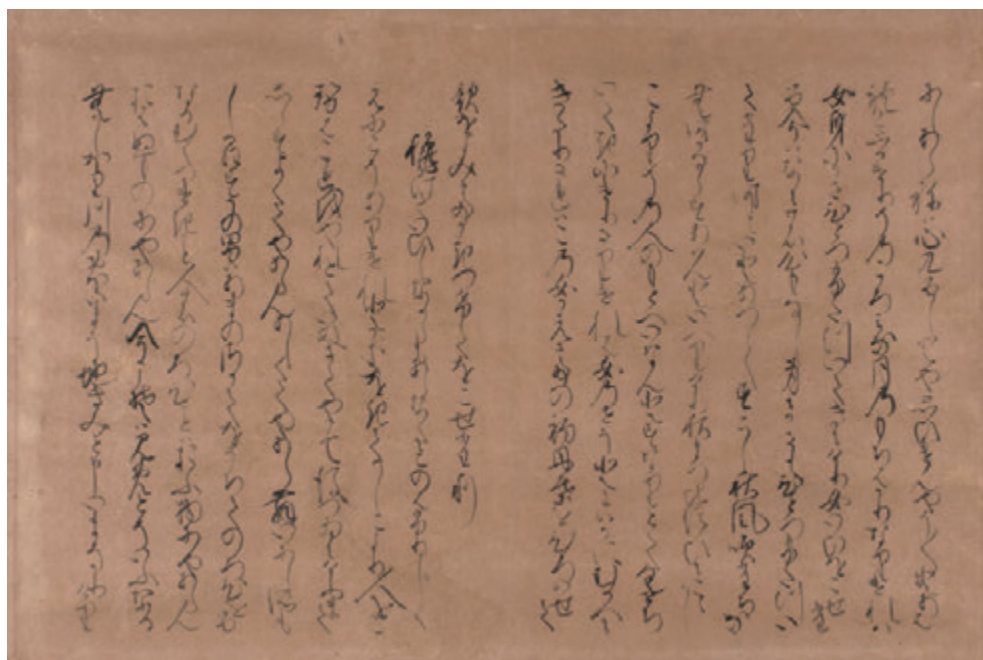
緑地亀甲紫花文散し緞子表紙 (35.0×50.0cm) 左肩素紙題簽 外題「伊勢物語」(近筆) 見返し表紙同裂 元袋綴奈良絵本 (30.0×22.4cm) 料紙金泥下絵布目鳥の子 半葉9行・字高約24.2cm 16面・金銀泥彩色画7図 漆塗箱

[132X@193@1]
(絵入り本プロジェクト)



(106段の絵)

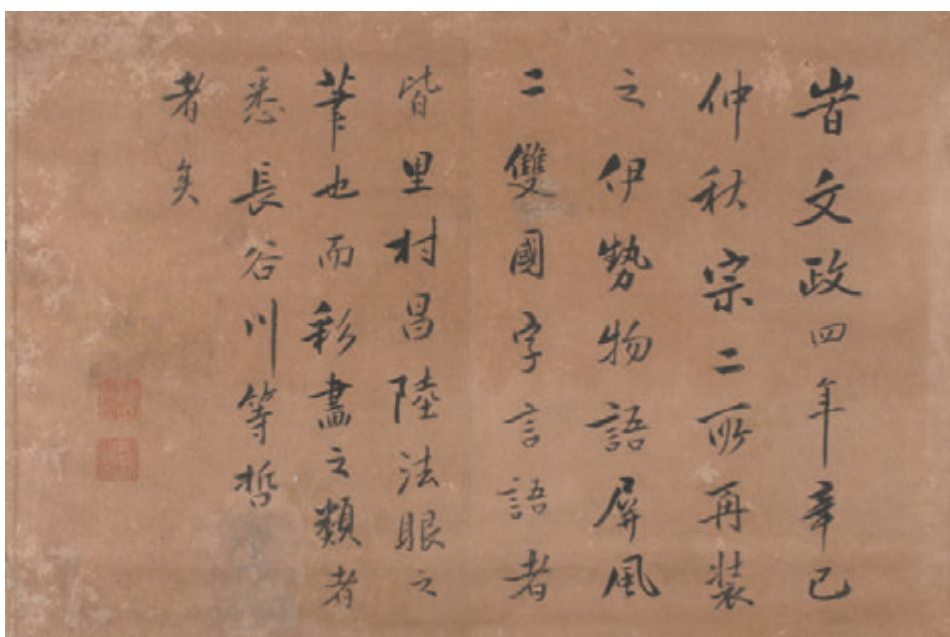
(78段の絵)





(125段の絵)

(119段の絵)

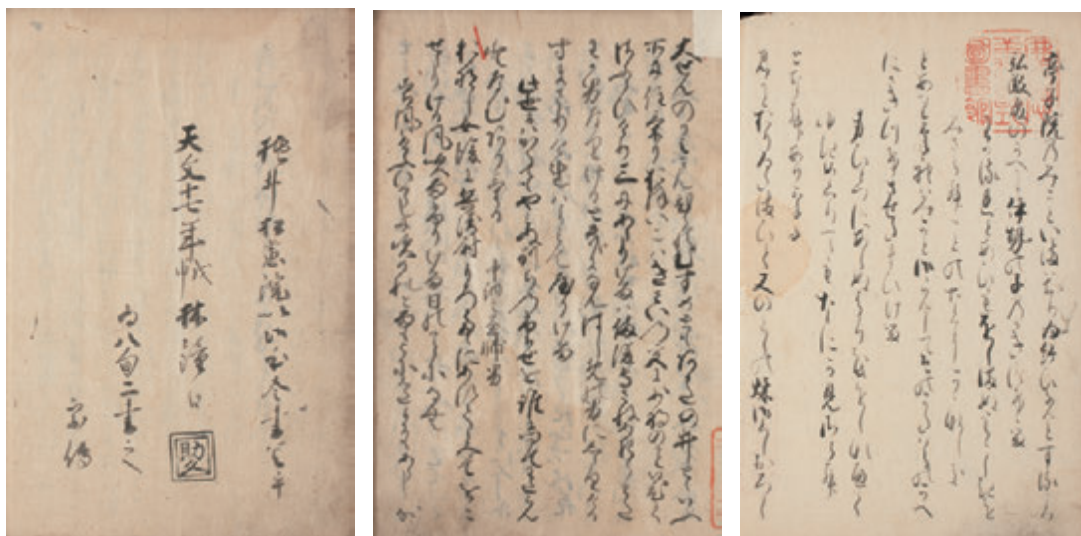


特大の奈良絵本を分割して屏風に貼り込んでいたものを、近時に折帖に貼り直したものの。遊紙であった部分にある文政4年「継山樵」(印文)なる人物の識語に、宗二(江戸初期の紙師宗二の子孫力)が2隻の屏風に仕立てたとし、文字は幕府連歌師の里村昌陸(さとむらしょうりく・1639～1707)で、絵は岩佐又兵衛息で長谷川等伯養子となった長谷川等哲とするが、鑑定は信じがたい。とはいえ書も絵もかなりの上級者の手になるものであり、大きさからしても、大名家の娘の婚礼等に際して特別に調製されたものである可能性もあろう。挿絵の構図は、後世に多大な影響力を有した古活字版「嵯峨本伊勢物語」に近いが、異なるものもあって注目される。布目の料紙は17世紀後半頃に使用例が集中するが、絵入り本での使用は珍しい。

8. 大和物語（前半）[江戸前期]・（後半）天文17年（1548）宗伝写 合1冊

後補薄茶色地霊芝雲・卍繫・華唐草等帯文蠟箋表紙（23.8×17.5cm）後補中央墨流題簽 外題「やまと物語」（前半と同筆力） 料紙楮打紙（前）半葉10行・字高約20.8cm（後）半葉10行・字高約21.0cm・朱合点 天保10年（1839）岡田啓識語 朝倉茂入極札 印記：「洒竹文庫」（大野洒竹）・「刀水書屋」（渡辺金造）他1顆

[141@95@1]



歌物語のもう一つの代表作が『大和物語』で、伊勢には遠く及ばないが、鎌倉写本を初めとして古写本も少なくない。

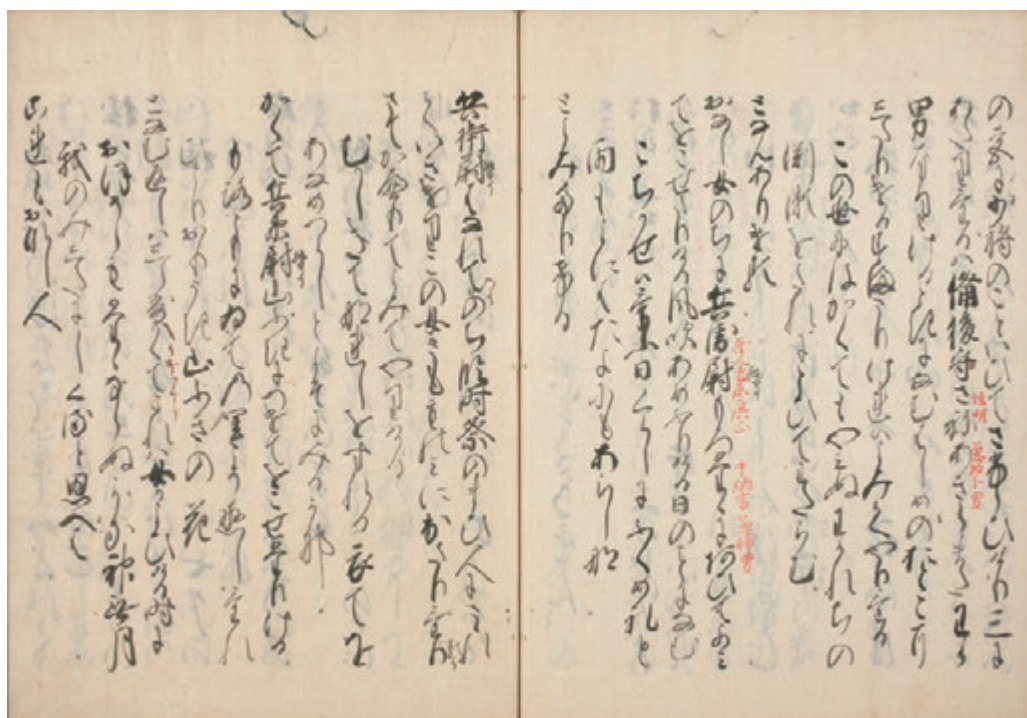
本書は後半だけの残欠であったものを、江戸前期頃に補写して完本としたもの。前半部は岡田啓なる旧蔵者が識語で、「本阿弥光悦の自筆なるかとまて思はる」と評するように、手慣れた光悦流の書風を示している。後半末尾には、「梶井松蕙院以御本令書写畢／天文十七年〈戊／申〉林鐘日「助久」（墨印）／為八句二書之／宗伝」との書写奥書があり、宗伝82歳の時の写という。江戸時代前期の古筆鑑定家朝倉茂入（あさくらもにゅう）の極札に「連歌師助久筆」とあるのは、奥書の墨印に拠るかと思われるが、宗伝と同一人物か否か不明である。助久は天文18年正月の千句の第一百韻で梅（近衛植家）の脇を付けた人物か。宗伝は未詳だが、連歌師に多い書風である。前後半共に流布本系の本文で、後半末尾には、「花山院の御作物語なりとある本あり」との陽明文庫蔵本等に見える識語があるのみで、素性を伝える本奥書などはない。

【参考文献】阿部俊子『校本大和物語とその研究』（三省堂、1954）

9. 大和物語 2巻 [近世初] 写 2冊

薄縹色表紙 (27.1×21.3cm) 左肩洗朱色地金銀泥草花文題簽 外題「大和物語上 (下)」(本文同筆) 料紙楮打紙 半葉12行・字高約21.8cm 朱筆注記・朱墨校合書入あり 印記:「岡田眞之蔵書」(岡田眞)・「月明荘」(反町茂雄) 帙に「九条家本」とあり

[110X@510@2]



撰家九条家旧蔵と伝えられるだけあり、室町時代の雰囲気を感じた上等な造本である。室町から江戸初期までの袋綴本は大きなものが多く、また本書の様に横幅の広いのが特徴である。本文は、室町中期の三条西実隆（さんじょうにしさねたか・1455～1537）を祖とする書流「逍遙院流（しょうよういんりゅう）」に属する能筆により丁寧に書写されており、本文同筆の異本注記や朱筆の勘物などと共に、学問的な雰囲気が濃厚である。流布本系本文ながら勘物を含めて古写本類との細かな異同も少なくない。末尾には「花山院の御作物語なりとある本あり」との陽明文庫本などに見える識語があるのみ。本書末尾に「月明荘」の印があるが、弘文荘の目録類には掲載されていない。昭和の大蔵書家岡田眞（おかだただし）の旧蔵。

10. 宝物集 3巻 平康頼著 [寛永] 刊 古活字 3冊

栗皮表紙 (27.0×19.5cm) 左肩薄水色題簽 外題「ほうぶつしょう 上 (中下)」(墨書) 内題「ほうぶつしょう 上 (中下)」 無辺無界・半葉11行22字前後・印面21.2×16.0cm 漢字平仮名交り・一部濁点ルビ付き活字 朱筆校合・振漢字等書入あり 未詳印1顆

[110X@399@3]



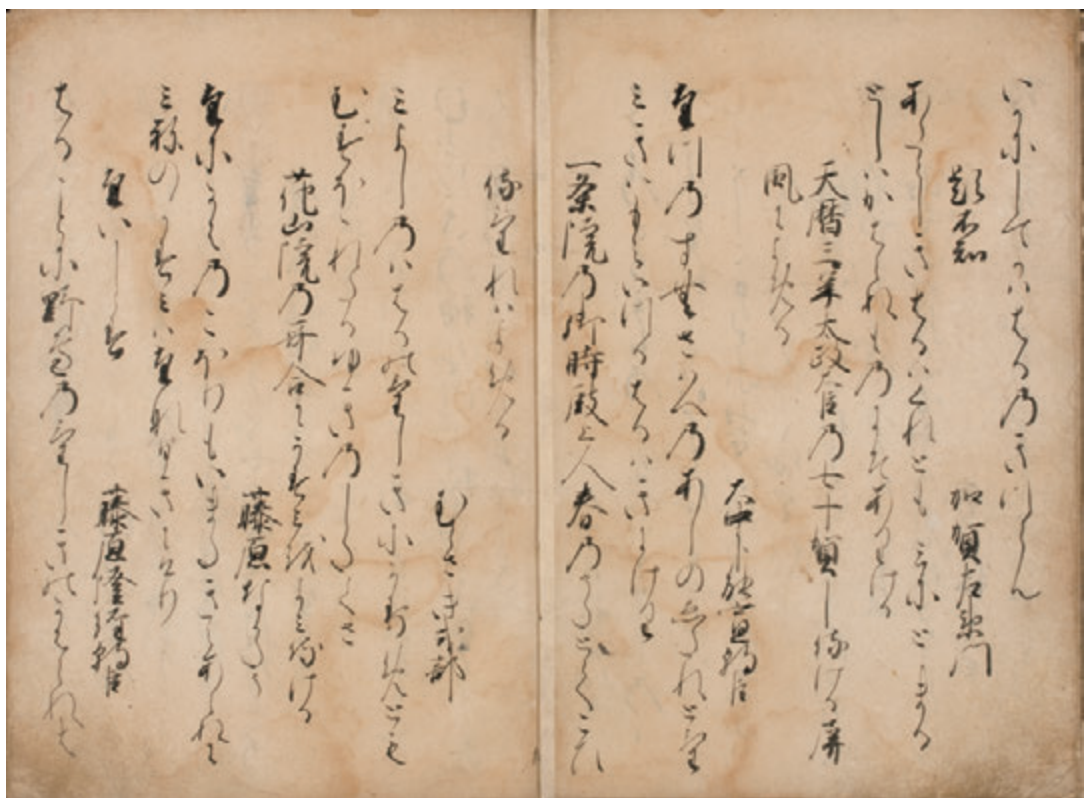
『宝物集』は、鹿ヶ谷事件で鬼界ヶ島に配流された平康頼(たいらのやすより)が、治承2年(1178)の帰京後に著わした仏教説話集である。説教の種本としても人気があったようで、1巻・2巻・3巻・7巻などの諸本があり、版本も多種が刊行されている。本書は3巻本に属する古活字版だが、『古活字版之研究 増補版』収載の4種に属さない新出本で、古活字版末期特有の濁点や平仮名ルビを付した活字を用いている。

『宝物集』は紫式部の墮地獄に関する記述があることでも著名で、本書の下巻にも、「むらさき式部そらごとをもつて、源氏物がたりをつくりしゆへに、ぢごくにおちてくげんをうくる、はやく源氏やきすてゝ、一日(ママ・「品」カ)経をかきとぶらふべしと人の夢に見えけるとて、うたよみどもあつまりてとぶらひしなり」(▲記号部分)との一節がある。源氏愛読者の夢に紫式部が現れ、虚構の物語を書いて地獄に堕ち苦しんでいるので、早く源氏物語を焼き捨て、自分の為に法華経を書いて供養して欲しいと訴えたというのである。これは永万2年(1166)頃に美福門院加賀(びふくもんいんかが・?~1193)が催した「源氏一品経供養」に関する記述と考えられるが、他にも同様の催しが確認でき、平安末頃には紫式部墮地獄説が広まっていたことが判る。

11. 後拾遺和歌抄 20巻存序巻1~4 藤原通俊撰 [鎌倉中期] 写 綴葉装 1帖

後補白茶色地丸龍小花唐草文金欄表紙 (23.2×16.1cm) 左肩題簽剥落跡 見返し新補雲母刷紙 料紙白斐紙 半葉10行・歌2行書・字高約19.8cm 印記:「青谿書屋」(大島雅太郎)

[110X@403@1]



『後拾遺和歌集』は、白河天皇の命で藤原通俊(ふじわらのみちとし・1047~1099)が応徳3年(1086)に完成させた第4代勅撰集で、紫式部が活躍した一条天皇時代(在位986~1011)の詠作を含む初の勅撰集である。勅撰集への撰歌は、国家的に歌人と認定されたことを意味する大変名誉なことで、本集には紫式部は3首、清少納言は2首が入集する。この差を2人はどう感じていただろうか。

『後拾遺集』の古写本は、内題の「集」を「抄」とするものが多く、本書も同様である。全体の5分の1に満たない残欠本だが、白みのある料紙と優美な筆跡は鎌倉時代高級写本の典型である。筆者の伝称はないが、二条為氏とでも鑑定されそうな法性寺流の書である。掲出部分の紫式部歌、「みよしのははるのけしきにかすめどもむすばゝれたるゆきのしたくさ」は、『新撰朗詠集』や『時代不同歌合』にも撰歌された、彼女の代表的な季節歌である。義塾出身の財界人で、『源氏物語』の代表的な伝本で、近年書誌学的な定説の誤りが明らかとなった、「大島本」の旧蔵者として知られる大島雅太郎の旧蔵。

12. 小倉山百人一首 [藤原定家] 撰 [江戸前期] 写 奈良絵本 1冊

萌葱色地宝尽松竹丸文金欄表紙(27.3×20.5cm) 左肩金紙題簽 外題「小倉山百人一首」(本文同筆) 見返し雷文繫空押金紙 料紙礬水引間似合紙 古い桐箱・箱書「百人一首」

[132X@172@1]



藤原定家が息子の岳父宇都宮頼綱の小倉山の山荘障子に貼る色紙の為に撰んだとされる100首は、「小倉山庄色紙和歌」や「小倉百人一首」など多種類の呼び方がある。和歌の入門書としても重視され、「三十六歌仙絵」などの流行に乗って歌仙絵形式でも作成されるようになり、江戸時代には西洋のカードゲームと合体した「百人一首歌留多」も成立した。

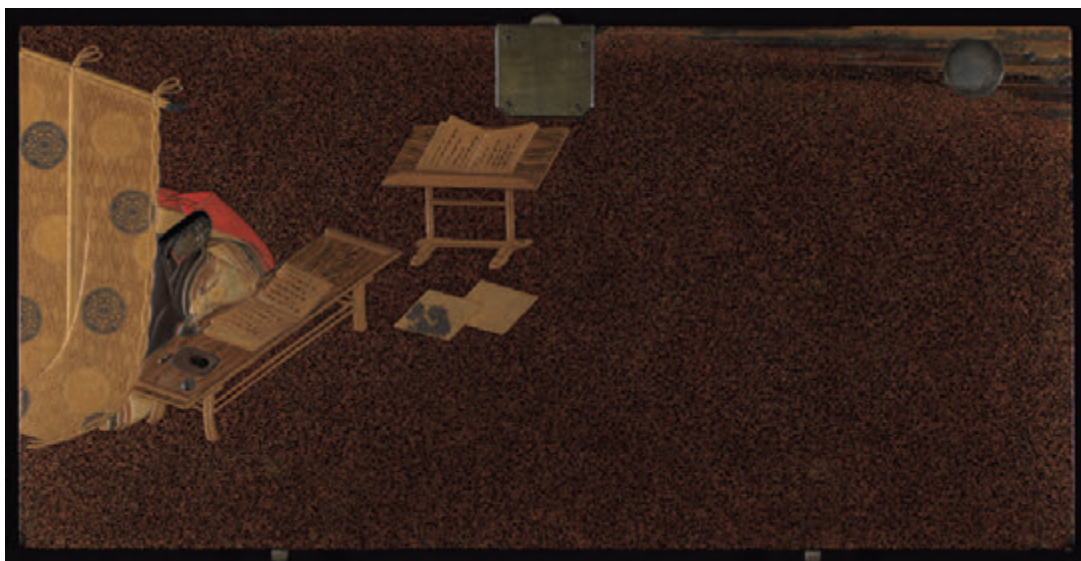
本書は江戸時代に少なからず作成された歌仙絵色紙形式の写本で、奈良絵本の周縁的な存在である。歌留多も含め百人一首絵は歌人が上畳に座することが多いが、本書には畳がないのでかえって歌人の姿が浮き出て見える。和歌の散し方も色紙の書法に倣うもので、寛永三筆の1人の昭乗(しょうじょう・1584～1639)を祖とする「松花堂流(滝本流とも)」に属する筆跡も美しい。本書の歌仙絵は色が淡く衣の文様も書き込まないので、伏し目がちな紫式部は大人しく見えるが、「百人一首」の紫式部は物語作者ではなく、あくまでも歌人としての晴姿なのである。

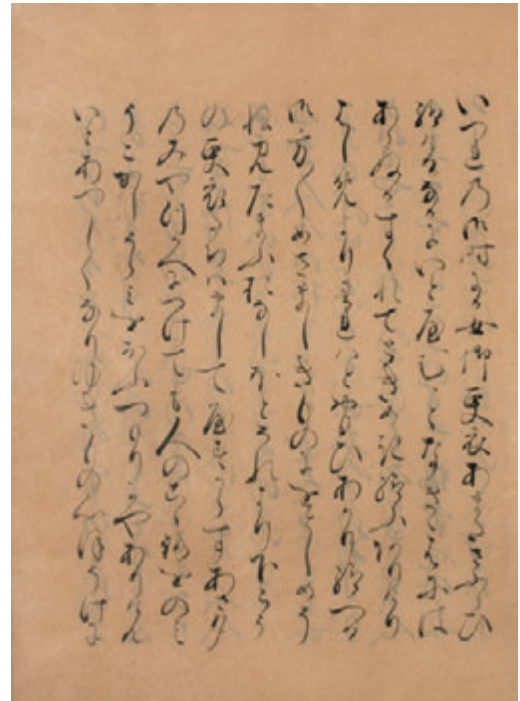
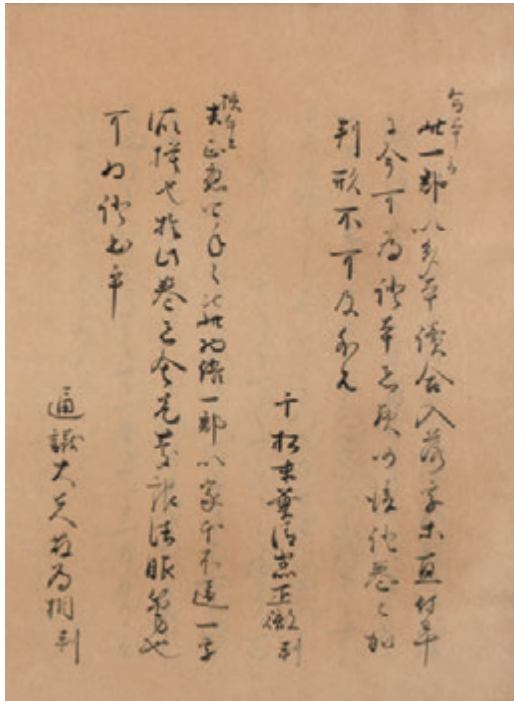
【参考文献】石川透「奈良絵本『百人一首』について」(『藝文研究』101、2011・12)

13. 源氏物語 54巻 [江戸初前期] 写 綴葉装 54帖

鳥の子地金銀泥雲霞草木等文表紙 (24.6×17.8cm) 中央金泥下絵雲紙題簽 外題「きりつほ」等各巻名(本文別筆) 見返し鳥の子地大小金切箔散し 料紙鳥の子 半葉10行・字高約19.0cm 全帖一筆 黒漆野菊文高蒔絵書物簞笥

[132X@158@54]





江戸時代には高貴な家を中心に、豪華に仕立てた書物を嫁入り道具に加える習慣があった。そのような書物を「嫁入本」と通称する。この源氏一揃いもその上等な一例で、筆筒も外見は一見地味だが、内側は輝く梨地で、蓋裏も蒔絵の紫式部像という豪華さである。「きりつほ」巻には桐の木と壺を金銀泥で描くといった具合に、巻名や内容を象徴する図を描いた表紙も、類例はあるが手の込んだものである。料紙の上質さも言うまでもない。筆筒の鍵金具に松川菱紋が刻されており、清和源氏小笠原家との関係が想定される。

嫁入本は見栄えを重視して、本文は版本写しであったり誤写が多かったりと、研究的な価値が低いのが普通である。本書には、桐壺巻に、室町前期の歌僧正徹（しょうてつ・1381～1459）の校合奥書2種（後者は嘉吉3年（1443））と、正徹が校合に用いた本の冷泉為相奥書、さらに正徹講釈を聞いた宗哲の奥書も存しており、珍しくまた貴重である。続く帚木～葵（除紅葉賀）の各帖にのみ正徹本奥書が存するのは、同文で以下の帖は省略されたのであろうか。本文は奥書の記述からも定家本（青表紙本）系統と判る。同じ奥書を有する伝本も数点が確認されており、比較研究が進められているところである。

【参考文献】菅原郁子「『源氏物語』正徹本の本文系統（一）」（『専修国文』92、2013・1）

14. 源氏物語「薄雲」断簡 伝藤原光経筆 [鎌倉中朝] 写 1葉

本紙16.6×11.8cm 料紙楮打紙 8行・字高約14.6cm 朱句点・合点 小津家襲蔵古筆切コレクション

[132X@176@1 (42)]



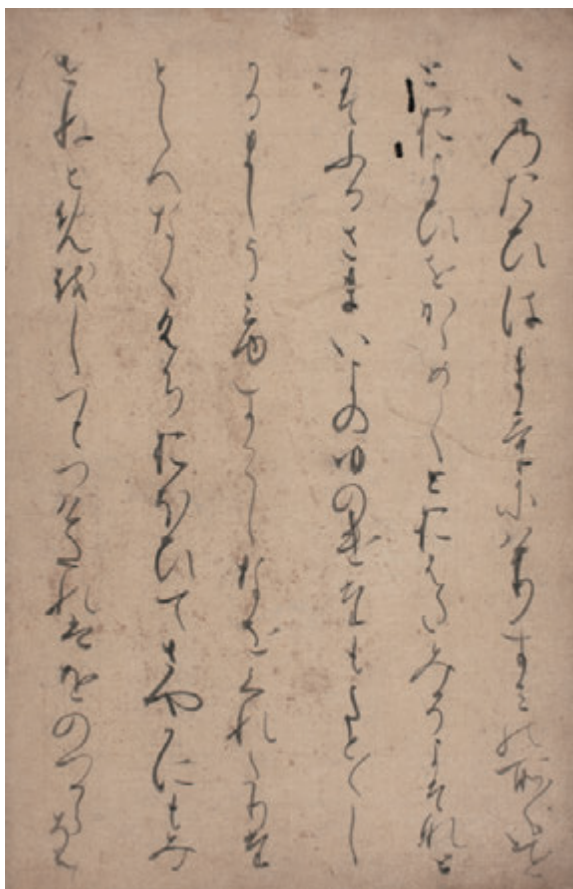
裏面に「藤原光経」と墨書がある。光経（みつつね・？～1260）は順徳天皇歌壇で活躍した歌人で、古筆切の筆者としては新古今集「八坂切」が著名で、本切とも書風に共通性は認められるものの別筆である。伝称に拘らず「薄雲」巻の古筆切を探すと、浄照坊蔵古筆手鑑や『源氏物語断簡集成』の中に、筆跡が良く似た慈円筆とされる枅形の六半切を見いだすことができる。高さもほぼ等しく、朱の句点の存在からも、これらが同じ本の別部分であると判断できる。それらは半葉10行書きであるので、余白の状態からして本切は左側2行が切断されていることが判る。

『源氏物語大成』629頁8行目～12行目に該当し、本切7行目の「はしちかう」は河内本にない語であり、その他の特徴からも「定家本系統」に属する本文と考えられる。4行目「やなきかえた」にある朱合点は加注箇所を示し、定家注釈「奥入」の、「梅かゝをさくらの花にゝほはせて柳か枝にさかせてし哉」（後拾遺集入集歌）に対応すると考えられる。7行目「はしちかう」の「ち」は重ね書きで読みづらい。2行目で「うつり」が補入されていることや、ツレの2枚の書きぶりからしても、かなり急いで書写したものと思われる。

15. 源氏物語「空蟬」断簡 [鎌倉中期] 写 1葉

本紙23.3×15.1cm 料紙楮打紙 6行・字高約21.6cm 小津家襲蔵古筆切コレクション

[132X@176@1 (58)]



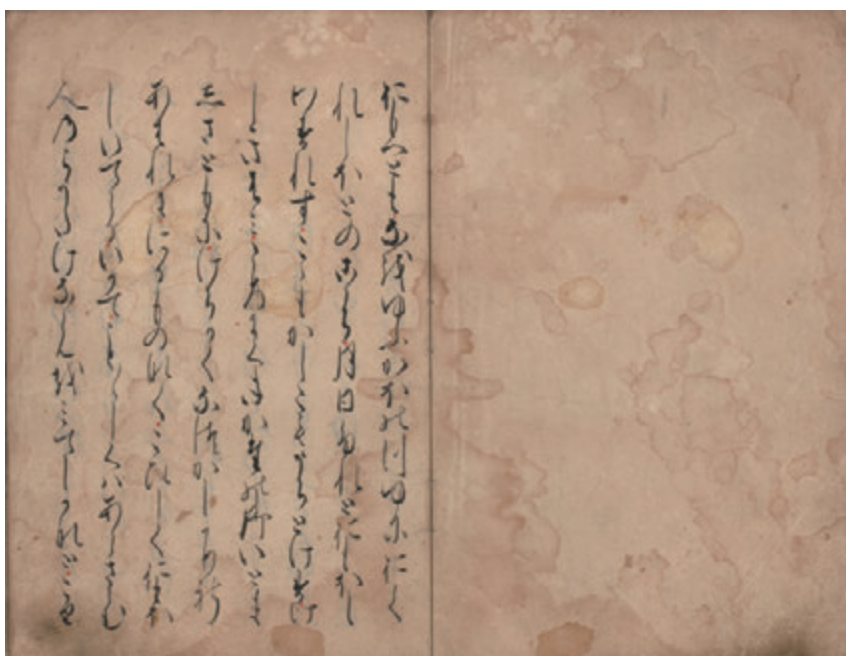
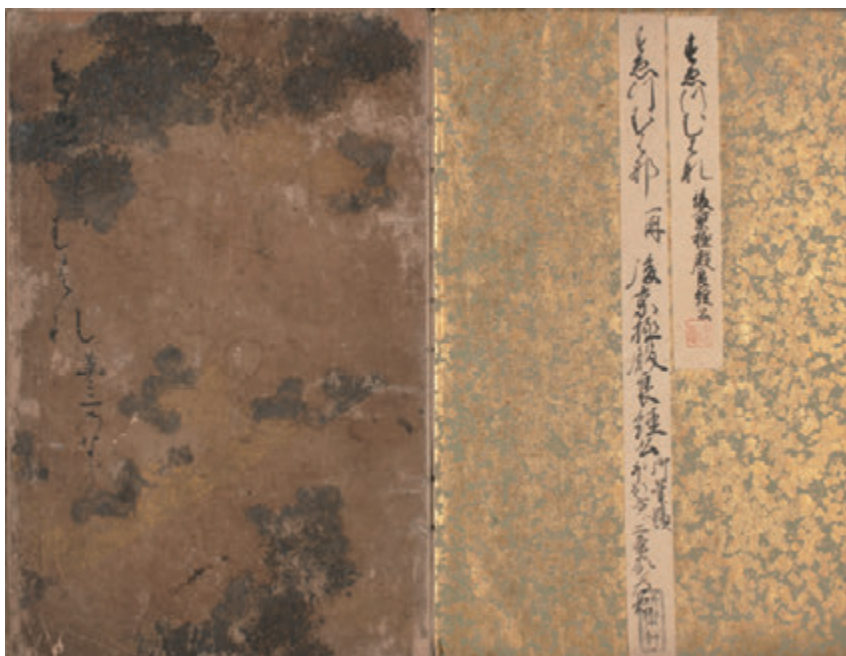
鎌倉時代の源氏写本は栞形が圧倒的に多く縦型は珍しい。また縦型は半葉8～10行程度で書写されるのが普通で、本切のように6行書きは極めて珍しく、他にツレも類例も見いだせない。文字も大粒なので、通常よりも多くの料紙を必要とする贅沢な写本である。筆者の伝称もないが、法性寺流に属するかと考えられる能書である。

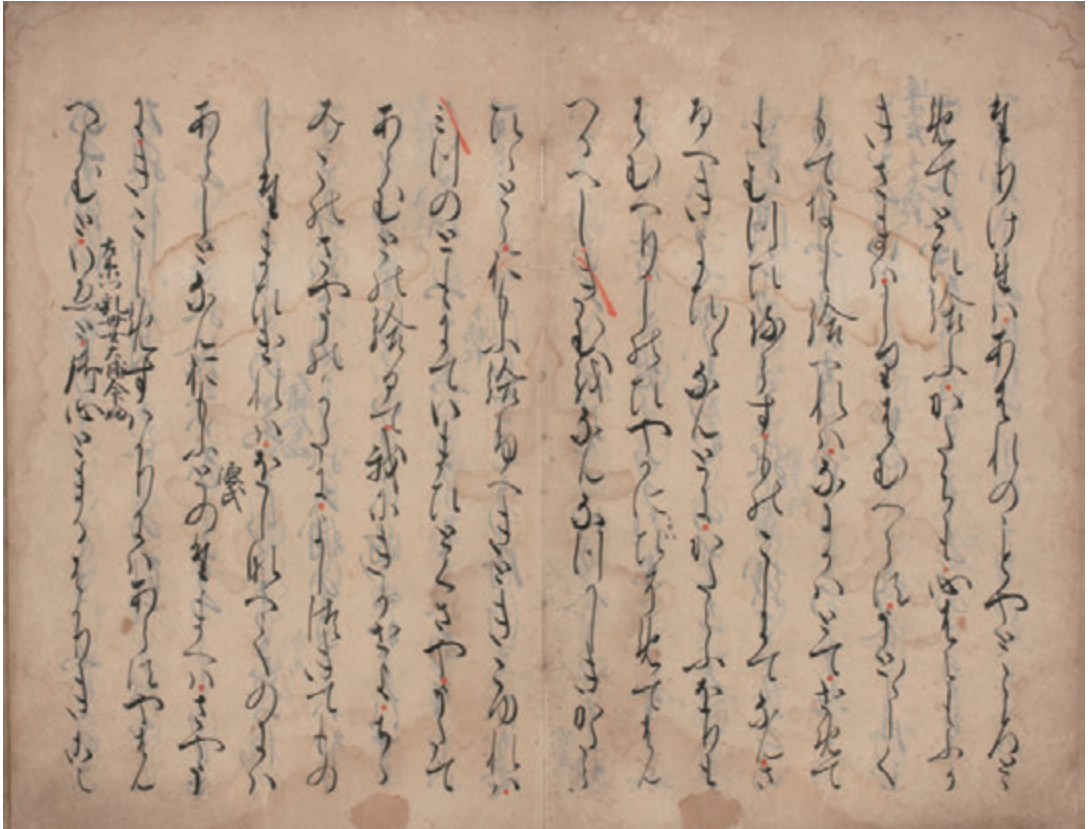
『源氏物語大成』87頁14行～88頁3行に該当し、本切4行目に河内本にない「すこしなをくれたり」（正しくは「…しゝな…」）を有することなどからして、「定家本系統」に属するものと考えられる。1行目の「けり」は何に重ね書きされたものであろうか。

16. 源氏物語「末摘花」 伝後京極良経筆 [鎌倉中期] 写 綴葉装 1帖

後補白茶色地作土霊芝花兎文金欄表紙(24.4×15.8cm) 外題なし 見返し後補鶯色地金小切箔散し 扉として薄茶色地金砂子銀野毛砂子散しの元表紙を貼付 扉左肩打付元外題「すゑつむはな第三のならひ」(本文異筆・伝二条為忠) 料紙鳥の子 半葉8行・字高約20.1cm 極札2種(2代畠山牛庵、一楽軒[栄二]) 朱句点・合点 後筆墨校合書入 新しい桐箱

[132X@191@1]





鎌倉幕府に仕え共に河内守となった源光行（みなものみつゆき・1163～1244）・親行（ちかゆき）親子が、20年掛けて21本を用いて校訂した本文を「河内本」と呼ぶ。四辻善成『河海抄』や一条兼良『花鳥余情』等の注釈書が用いているように、室町前期頃までは定家本より広く用いられた本文である。意味を通りやすくした混成本文とも評されるが、本文が乱れていた当時には必要な措置だったのである。今日では河内本の代表として、書写も古く残存帖数も多い名古屋市蓬左文庫蔵の「尾州家本」が用いられている。

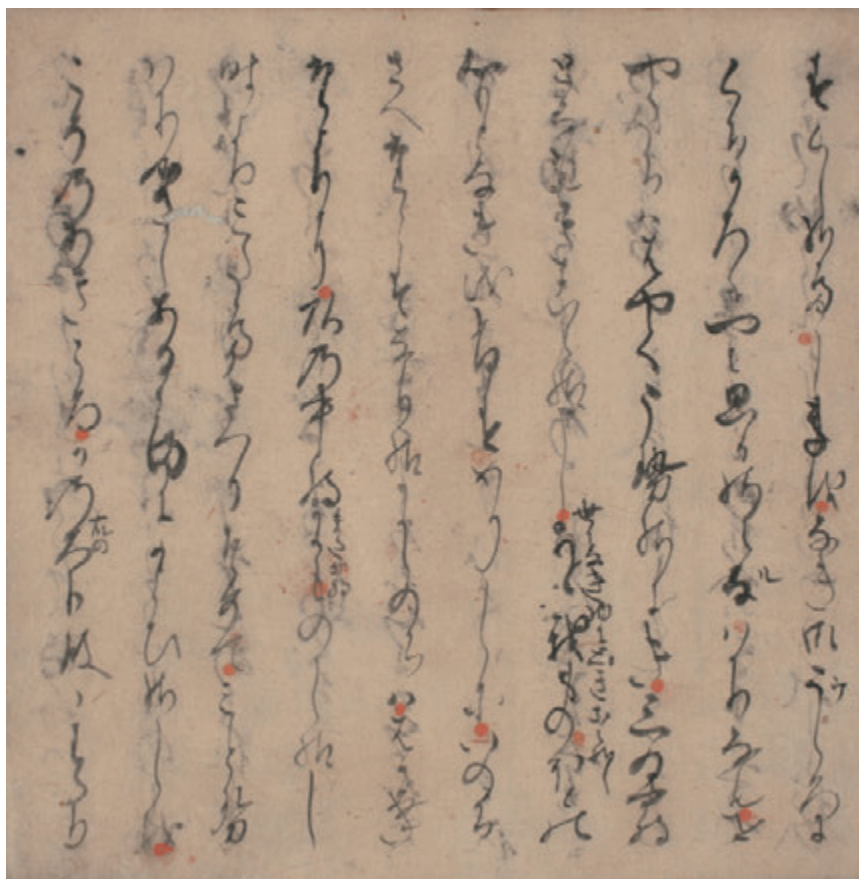
本書は河内本成立期の書写で、物語写本として珍しい四半本であるとともに、良質の料紙に後京極流に属する優美な筆跡でゆったりと書写されている。特別な清書本であった可能性が高く、僅か1帖であっても「河内本」本文の考察に極めて重要な存在である。書写時よりやや遅れそうなものの、古い表紙が扉として残っているのも貴重で、物語の外題は中央という当時の故実と異なり、外題が左肩にあることも興味深い。

朱句読点・合点・声点の外、別筆と思われる人名の書入れなどがある。朱合点は、『紫明抄』等の被注箇所とほぼ一致し、注釈と関連するものと考えられる。細字の校合・補入書入れは、新しい箱の蓋裏の「末摘花巻校合了不足無之」との識語と同筆で、近代のものと判る。

17. 源氏物語「夕顔」断簡 [鎌倉後期] 写 1葉

本紙 16.0×15.7cm 料紙楮打紙 10行・字高約14.4cm 朱句点 小津家襲蔵古筆切コレクション

[132X@176@1 (62)]



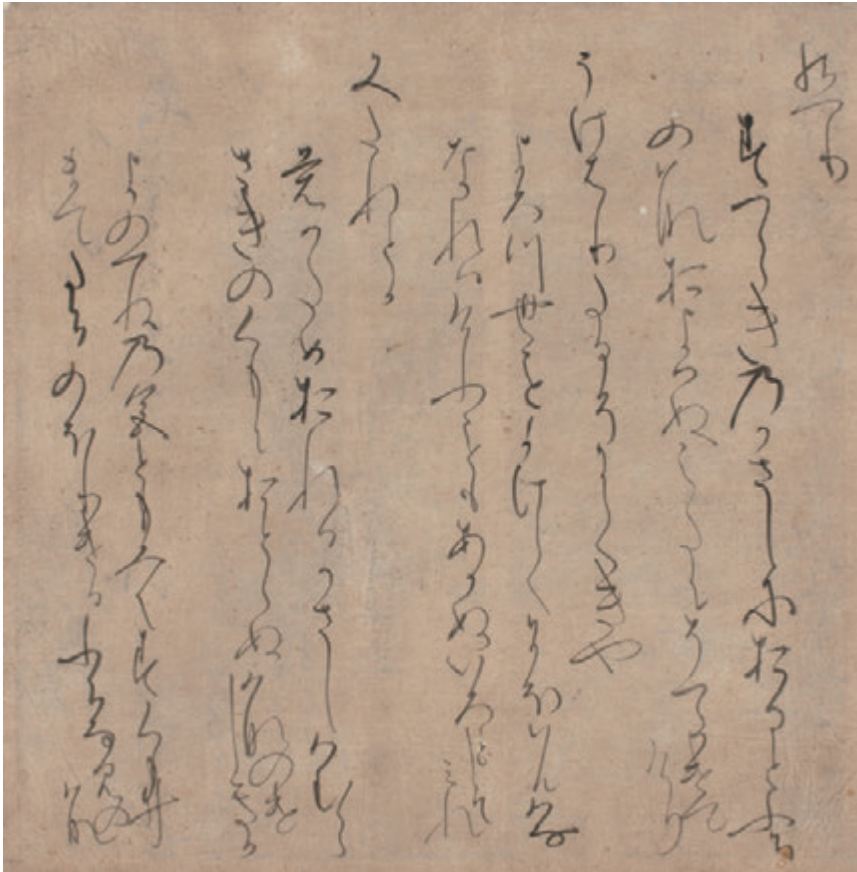
源氏の鎌倉写本に多い枡形本の断簡で、行数や速筆の様子もこの時期の典型と言える。冷泉為相あるいは二条為明とでも鑑定されそうな形態と書風であるが、極札や紙背の書き入れなどはなく、「夕顔」切を探してもツレを見いだすことはできない。

本文は『源氏物語大成』の138頁10行～139頁1行に該当し、本切2行目に「くちかるく」（定家本は「くちさかなく」）とあることなど、「河内本」系統であると判断できる。朱句点は河内本に目立つが、この様に大きいのは珍しい。4・7行目の傍記は書き落としを同筆で補入したものである。最終行の「かの」の右下に「右の」とあるのは、河内本諸本に「かの」は無いので、「右の」に訂したいのか。1行目と2行目の読みにくい仮名に、片仮名が添えられている。同じ河内本でも、展示番号16とは書物の格が異なることは明らかである。

18. 源氏物語「宿木」断簡 伝藤原俊成筆 [鎌倉前期] 写 掛軸1幅

本紙16.1×15.8cm 料紙楮打紙 12行・字高約14.3cm 極札2種（6代古筆了音、13代古筆了仲）桐箱

[132X@192@1]



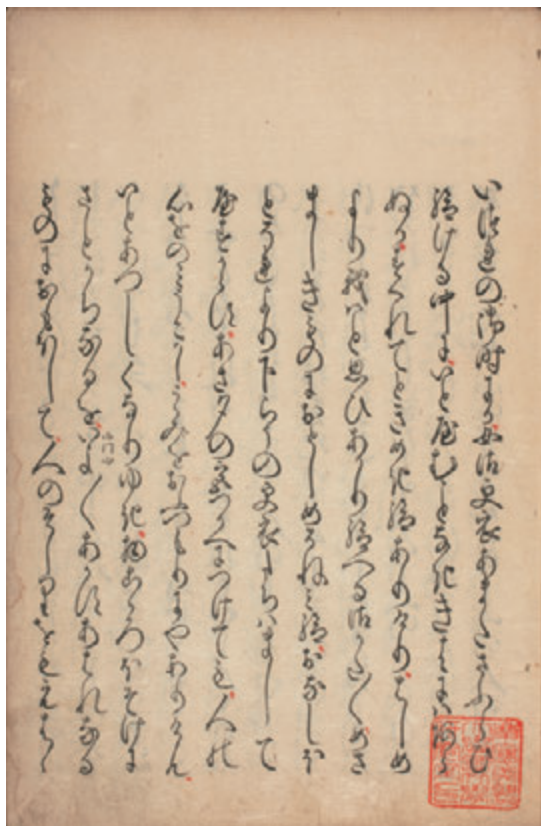
「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」とは藤原俊成の名言であるが、その俊成筆と鑑定された「宿木」の断簡である。もとより俊成真筆ではないが、行線が傾き連綿のきつい書きぶりは平安の名残を感じさせる。俊成筆とされる源氏切は珍しく、他に「帚木」切が知られるが同筆ではない。またこの「宿木」切もツレを見いだせない。

『源氏物語大成』1779頁11行～1780頁3行に該当し、本切初行「給へり」は、「定家本」は「給へりけるとか」、「河内本」は「給けるとか」とあり、この他の特徴からも、両系に属さない「別本」と判断できる。俊成生前には定家・河内両系は成立していないので、書写年代からして当然ではある。和歌が続く源氏と判断しづらい部分である。物語中の和歌は、数文字下げて書き出し、2行目の和歌末尾に地の文を続けるのが一般的な書法である。本切は1首2行共に行頭を下げ、歌と地の文とを分けており、3、4首目に1行分の空きがあるのも珍しい。了音（りょうおん）の極札は正徳2年（1712）3月、了仲（りょうちゅう）の札は安政元年（1854）2月の鑑定だが、後者の裏面には「哥切」とあり源氏と判断できなかったらしい。

19. 源氏物語 54巻欠夕顔 [寛永正保頃 (1624~1648)] 刊やや後印 五つ目綴 53冊

濃縹色艶出表紙 (27.0×18.4cm) 中央無枠刷題簽 外題「きりつほ」等巻名 無辺無界・半葉11行・印面19.4×14.9cm 刊本『湖月抄』の夕顔・雲隠説2冊を補配 朱句点 墨人名濁点等書入

[JL@1A@163@55]



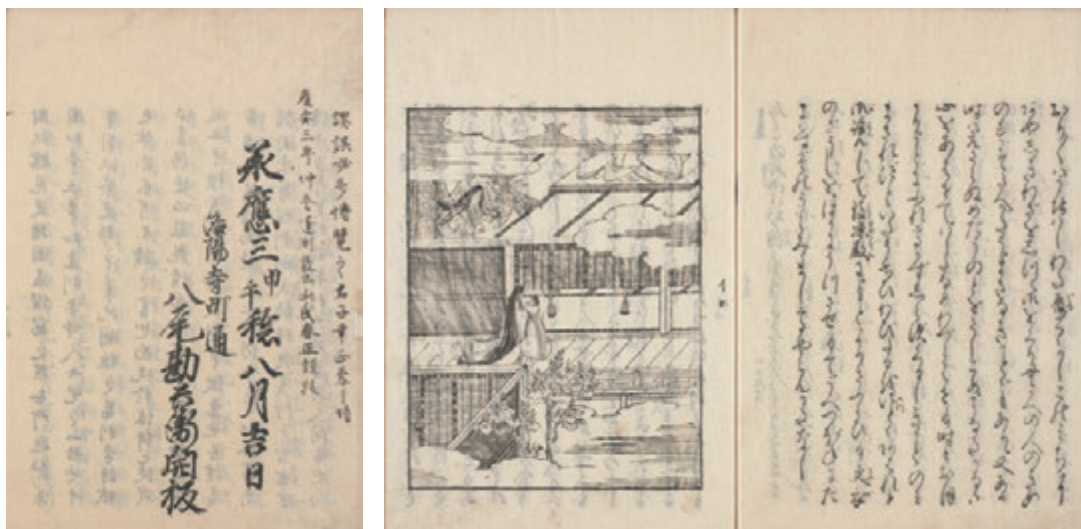
出版の時代にも源氏人気は衰えることなく、近世初期の約50年間に制作された古活字版でも5種が刊行されている。古活字版は商業出版には不向きで、従来の整版印刷が主流となったが、整版初の源氏が本書である。仮名の古典の版本は、当初は写本の複製として作られたが、次第に挿絵や注釈などを加えて商品価値を高めるようになる。本文のみの源氏は珍しい存在となり、本版のようなものは「素源氏 (すげんじ)」とも呼ばれた。源氏版本の本文は「定家本」に属し、室町時代写の「三条西家本」に近いことが知られ、版本間で小異のあることも明らかにされている。本版は同じ「素源氏」の元和古活字版や、承応元年 (1652) 松永貞徳跋刊の注釈『万水一路』と本文の共通性が高いとの指摘がある。題簽は筆跡・彫りの技術共にやや稚拙な印象があり、本書は中央にあるが、同題簽を左肩に貼る九州大学附属図書館本の例もある。外題表記を「龍狼木」(さかき)・「赤石」(あかし)・「水衝石」(みをつくし) とするのは珍しく、本文共々版本『万水一路』に受け継がれている。

【参考文献】 清水婦久子『源氏物語版本の研究』(和泉書院、2003)

20. 源氏物語 54巻附：山路の露・目案3巻・系図・引哥 山[本]春正編 京・八尾勘兵衛 承応3年（1654）刊後印 絵入 60冊

白地薄茶色地毘沙門繫松竹梅丸文刷表紙（26.7×19.0cm）中央無枠刷題簽 外題「きりつほ〈一卷／詞を名とせり〉」等巻名と注記・「源氏目案〈上いより／ちまて（中よより／やまて・下あより／ゑまて）〉」・「源氏系図」・「源氏引哥」 内題「源氏目案巻第一（～七）」・「源氏物語引哥」 無辺無界・半葉11行・印面20.1×15.0cm 印記：「観□亭」 慳貪箱（箱書与謝野晶子、蓋裏にも自詠源氏巻名短歌を墨書） 与謝野晶子自筆色紙2枚添付

[57X@27@60]



伊勢では古活字版の絵入り本があるが、分量が災いしてか源氏では作成されていない。源氏絵入り本は慶安3年（1650）の整版本が初めてで、226図も挿絵があるのみならず、本文にも句点・濁点や振り仮名・人名などの傍注も付刻されている。さらに中世期に制作された続篇の『山路の露』、「いろは順」の源氏語辞典と言える『源氏目安』、登場人物を系図形式で整理した『系図』、本文で踏まえられた和歌を巻別本文順に列挙した『引歌』等を、付録として加えており、以後の源氏版本に大きな影響を与える存在となっている。この「絵入源氏」の祖を編纂し挿絵も描いた山本春正（やまもとしゅんしょう・1610～1682）は、蒔絵師でありながら、木下長嘯子（きのしたちょうしょうし・1569～1649）や飛鳥井雅章（あすかいまさあき・1611～1679）等に学んだ歌人である。この版本は、春正の様な近世的な新興知識人が欲していた源氏版本の姿を、具現化したものと言えよう。

本書は、慶安3年春正跋無刊記版に、「夢浮橋」末には「承応三〈甲午〉稔八月吉日／洛陽寺町通／八尾勘兵衛開板」、「引歌」末にも「承応三〈甲午〉八月吉日 〈洛陽寺町通〉（右傍）八尾勘兵衛刊行」との刊記を加えたものの1本である。同版本は濃縹色系の表紙が一般的だが、江戸中期の上方絵本などで用いられた「行成表紙（こうぜいびょうし）」を有する後印本である。

【参考文献】清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院、2003）

21. 源氏物語 54巻附：山路の露・系図・引歌・表白 欠：第24冊（浮舟・蜻蛉）・
目案 [京]・林和泉掾[出雲寺和泉掾] 万治3年（1660）刊後印 絵入横本
26冊

萌葱色艶出表紙（14.8×21.0cm）中央紫色水玉紙題簽（三冊目後補素紙） 外題「きりつほ／は、木々 一」等巻名と冊数・「山路の露／けい図」・「源氏〈引哥／表白〉」 内題「源氏物語引哥」・「源氏くやうの表白」 無辺無界・半葉16行・印面12.1×18.9cm 朱読点

[JL@1A@161@26]



春正の絵入り本は好評で、慶安3年（1650）から10年後には2匹目の泥鰌を狙った横本が刊行された。春正の跋文を除き、「源氏くやうの表白」を付加するなどの独自色を出したもので、横本の形態については、刊記で「寄於六半之形畢」と、枳形写本を模したとするが、苦しい説明である。室町時代の横本源氏写本の例はあるが、古活字版『匠材集』等の横本の先例に拠りつつ、承応本とは明らかに別版であることを示したかったのであろう。

この「万治横本」には、夢浮橋に「今此開板之本…私表白一卷刊梓／龍集万治三年庚子／除念一日／洛陽二条通観音町／かしは屋／渡辺忠左衛門開板」、表白末に「洛陽二条通観音町／渡辺忠左衛門開板」との刊記がある初印本と、「洛陽」以下を削除し「林和泉掾開板」・「林和泉掾板行」と埋木をした後印本がある。元禄9年（1696）の「書籍目録」では既に「いづみ（和泉）」と刻されているので、早々に版木が売られたらしい。

本書は林和泉掾の刊記があるものだが、17世紀後半頃に良く用いられた水玉紙を題簽に用いた、写本の様な表紙を有している。特装本として制作されたものか。

【参考文献】吉田幸一『絵入本源氏物語考（上）』（青裳堂書店、1987）

22. 源氏物語 54巻附：山路の露・系図・引哥 欠：爪印3冊 [江戸前期] 刊
絵入小本 27冊

青鈍色艶出表紙（15.8×10.8cm）左肩無粋刷題簽 外題「桐壺／はゝ木々」等巻名・「やま
ちの露／系図」・「引歌」 内題「源氏物語引哥」 四周単辺（11.6×8.8cm）無界・半葉11行
上欄墨書入 印記：「守山文庫」

[JL@2A@898@27]



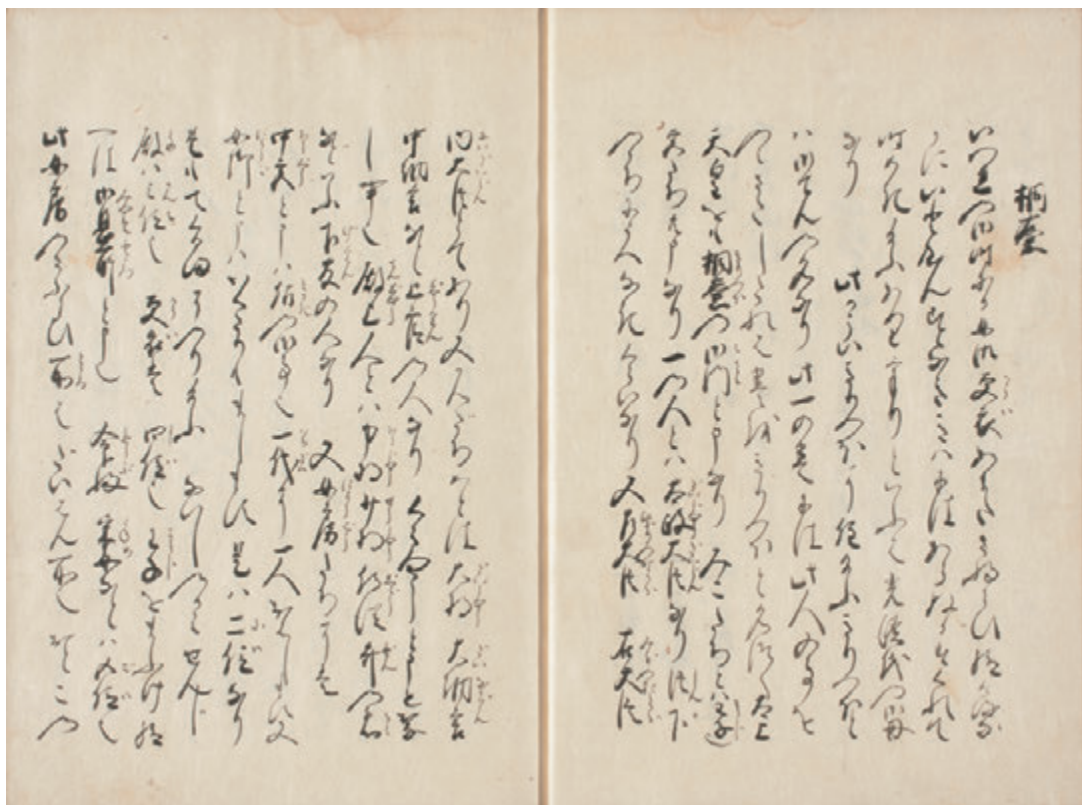
「絵入源氏」の流行は、「万治横本」に続いて「無刊記小本」をも産み出した。寛文6年（1666）刊とされる「書籍目録」に60冊の絵入小本が見え、元禄9年（1696）の目録では30冊で「吉田／中野小」とあり、冊数を減らして吉田屋四郎右衛門と中野小左衛門の相版で販売されたことも判明する。元禄9年時の代金は60冊の大本が銀2枚、30冊の半切（横本）が銀1枚、30冊小本が30匁である。銀1枚は銀43匁で、銀60匁が金1両であるので、大凡の金額差が判る。この小本は内容的には横本よりも忠実に大本を継承しているが、春正跋文はなく、「目案」を「爪印」と改題する他、若干の校訂がなされている。注目すべきは、大本や横本に無い本文の枠線である匡郭が加えられたことである。伊勢の版本も承応3年（1654）刊の絵入り小本には匡郭が加えられており、判型の共通性は興味深い。

【参考文献】 吉田幸一『絵入本源氏物語考（上）』（青裳堂書店、1987）

23. 源氏袖鏡 3巻〈源氏大鏡〉〔江戸初期〕写 3冊

紺色艶出表紙 (27.7×20.2cm) 左肩丹色題簽 外題「源氏袖鏡上〈自桐壺／至明石 (中〈自
滯標／至藤裏葉〉・下〈自若菜上／至夢浮橋〉)〉」(本文同筆) 内題「一けんしのまへかき／
一同もくろく」(目録)・「桐壺」等各巻名 料紙厚手上質楮打紙 半葉10行・字高約21.2cm
同筆平仮名ルビ 印記:「六條庫文」

[214@234@3]



源氏梗概書は数多いが、『源氏大鏡』と総称されるものは、「(光) 源氏物語のおこり」で始まる序文を有し、物語の全歌を収載し、注釈的要素を加味していることに特色がある。『源氏小鏡』には及ばないが伝本も少なくなく、本文は3類 (乃至4類) に分類されている。

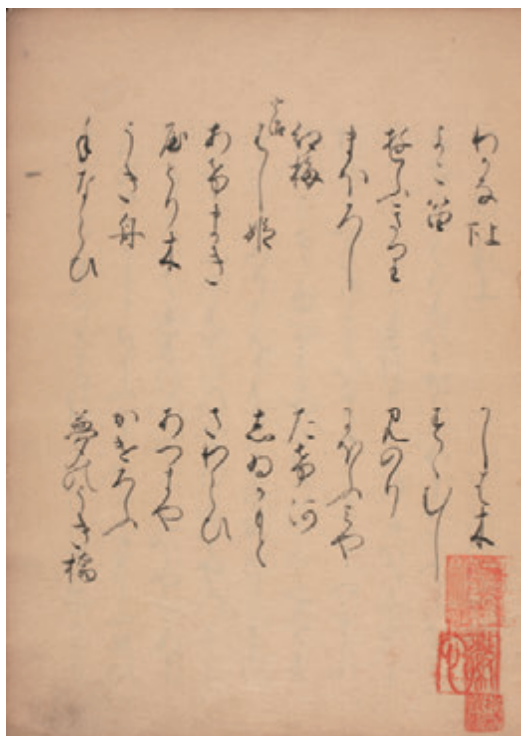
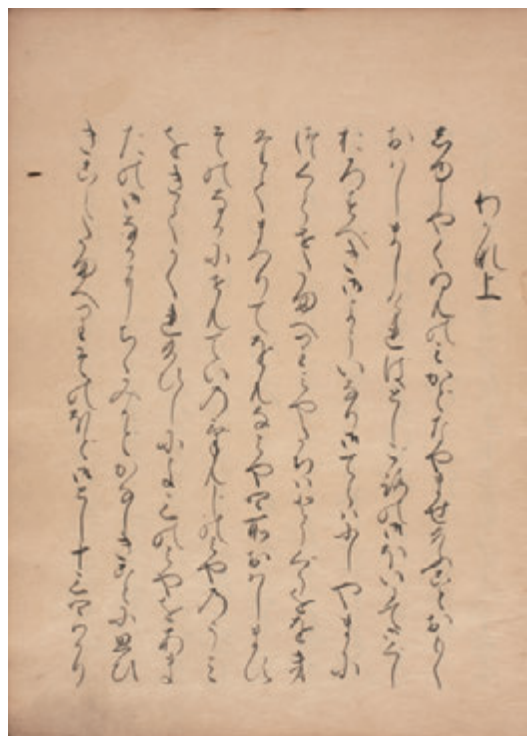
本書は大鏡に属するものながら、序・本文共に分量が多い特異な伝本である。同内容を有するものは、第2類に分類される、外題に「袖か・み」とある九州大学附属図書館細川文庫本 (宇土細川家旧蔵) のみである。九大本とは書写年代も近いが、5冊本で冊数も異なり、本書に存する、「此さうしはげんじ物かたりのおもむきを大かた／かきぬきたるなり哥はみなかきのせたり物／かたりのしさいをしらしめんとの事なり」との跋文を有さないなどの相違点がある。今後の「袖鏡」の研究は両本を用いて行う必要があろう。

【参考文献】田坂憲二編『袖鏡 (上・下)』(在九州国文資料影印叢書刊行会、1981)

24. 三帖源氏 3巻存巻下 〈源氏大鏡〉 [江戸前期] 写 綴葉装 1帖

墨色地金泥遠山樹木屋舎等文表紙 (23.5×16.8cm) 中央丹色地金泥雲霞文題簽 外題「三帖源氏」(本文同筆) 無題巻名目録(わかな上～夢のうき橋)あり 内題「わかな上」等巻名 料紙鳥の子 半葉10行・字高約18.0cm 印記:「松崎蔵書」・「徹心」・他2顆

[JL@2A@1085]



3類(乃至4類)に分類される『源氏大鏡』諸本の内、第1類本の中に「三帖源氏」との外題を有する一群があり、東京大学・京都大学他の大学図書館蔵本や個人蔵のもの等が知られている。これらは、一般的な伝本にない巻名目録を有するが、一般本が有する内題の巻名下の源氏・薫等の年齢注記はなく、本文は漢字表記が少ない等の特徴があることが指摘されており、それは本書にも認められるところである。

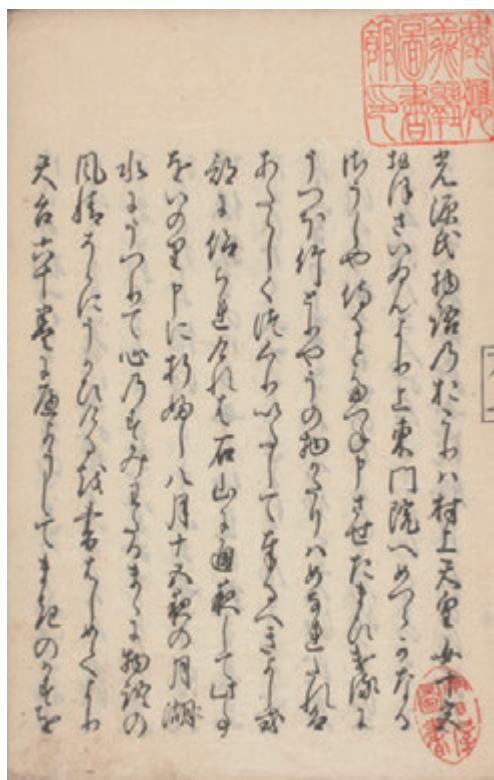
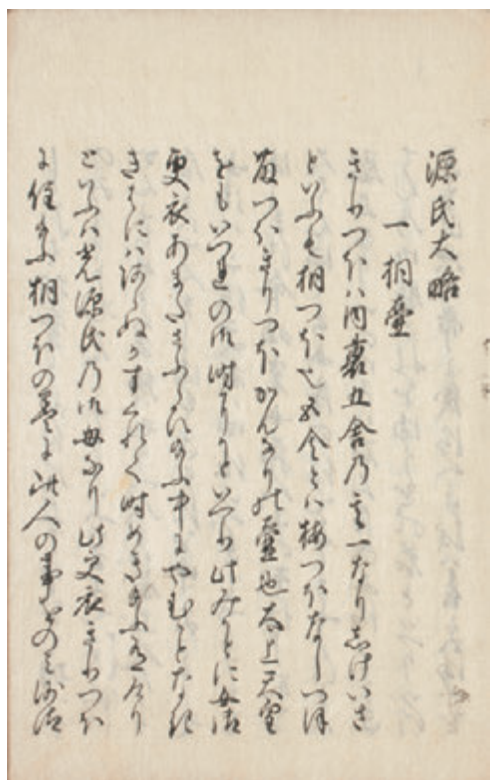
漢字を増やすことは理解の手助けとはなるが、通常の源氏写本の表記からは遠ざかることとなる。仮名ばかりの「三帖源氏」は、コンパクトな源氏写本として編集されたものではないだろうか。本書が「嫁入本」の特徴を濃厚に示していることは、その推定の補強材料となろう。題簽下部に傷があるのは、「下」等とあったものを削り、一見しただけでは残欠本と判らなくするための所為であろう。

【参考文献】石田穰二・茅場康雄編『源氏大鏡(訂正版)』(古典文庫、1989)

25. 源氏物語大略 12巻 〈十二源氏袖鏡〉 [京]・中野道也 明暦2年(1656)刊
五つ目綴 12冊

濃緑色地雷文繫蓮華唐草文空押表紙(27.1×18.3cm)中央子持杵刷題簽 外題「源氏物語大略一(～十二)」 目録題「源氏大略第二(～十二終)」(第1冊のみ目録は単辺で囲んだ巻名のみ) 内題「源氏大略」(各冊、改行して并を含めた巻数と巻名) 無辺無界・半葉10行・印面20.3×14.7cm 印記:「両日屋図書」・「穠翠亭珍藏」

[231@7@12]



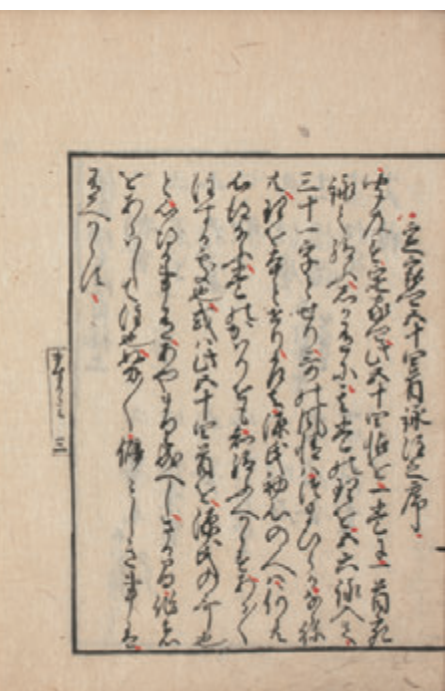
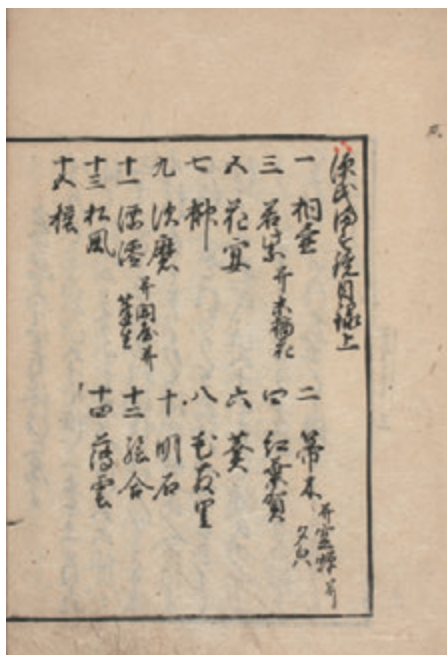
本書は『源氏大鏡』第3類に属する版本で、刊記に「明暦二年丙申仲冬／書林 中野氏道也新刊」(双辺木記)とある。これに先立つ慶安4年(1651)の同書肆版があるとの報告もあるが、所在不明である。また外題を「十二源氏袖鏡」、内題を「源氏袖鏡」に改め、本文はそのまま、「承応3年絵入源氏」を真似るなどした挿絵113図を付加した、万治2年(1659)書林堂版も存在している。明暦2年版は京都大学附属図書館蔵本が確認できる程度で、刷り保存共に良好である本書は、この版を代表して利用されるべきものであろう。

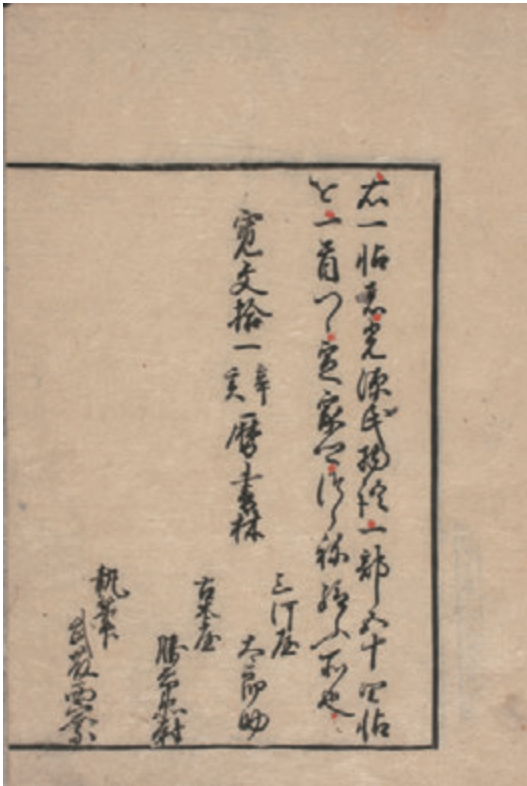
【参考文献】 吉田幸一『絵入本源氏物語考(上)』(青裳堂書店、1987)

26. 源氏ます鏡 3巻 [宗祇] 編 [京]・三河屋太郎助 [京]・古本屋勝兵衛尉
寛文11年(1671)刊 絵入 5冊

濃緑色艶出表紙(22.3×15.9cm)中央無枠刷題簽 外題「<ゑ／入>源氏ます鏡上之一(上之二・中之一(二)・下)」内題「源氏ます鏡序」・「源氏ます鏡目録上(中・下)」・「源氏ます鏡上(中・下)」 四周単辺(15.5×12.0cm)・半葉11行 朱星点・句点

[220@22@5]





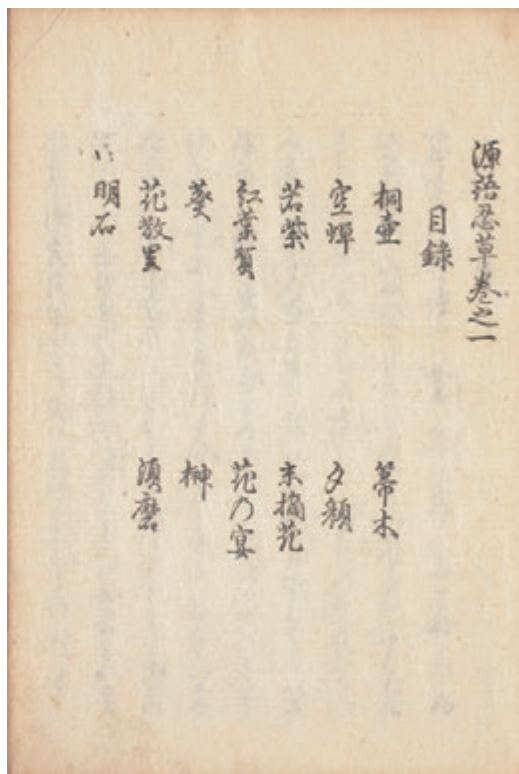
「源氏物語のおこりは…」で始まる『源氏大鏡』に共通する序文を有するものの、序題下に「定家卿引哥 宗祇作」とあって、巻頭目録の次に「定家卿五十四首詠注之序」が続くように、定家作とする源氏巻名和歌54首に、宗祇作とされる梗概にもなる注釈文を付した特殊な作品である。同内容の写本は大東急記念文庫と神宮文庫のもののみで、版本も他に1本が知られるだけである。本書には「寛文拾一〈辛亥〉暦書林 〈三河屋／太郎助／古本屋／勝兵衛尉〉／執筆／武藤西察」との刊記があるが、いま1本の京都大学文学研究科図書館本は、「寛文拾二年壬子孟春吉辰執筆武藤西察 婦屋仁兵衛」とある翌年の別書肆のもので、本文部分の匡郭もない。江戸前期の出版事情を検討する上で興味深い対象であろう。挿絵の構図は寛文6年（1666）刊『源氏小鏡』小本の影響を受けているようである。

【参考文献】寺本直彦『源氏物語受容史論考（正編）』（風間書房、1970）

27. 源語忍草 5巻 北村湖春著 天保5年(1834)序刊 5冊

黄檗色地若葉色忍草文刷檀紙文空押表紙(25.8×18.8cm)中央雲母散し水浅葱色刷題簽 外題「源氏物語忍草一(～五)」 目録題「源語忍草卷之一(～五)」 無辺無界・半葉10行・印面19.6×14.9cm 序:成島司直(篠木信定筆) 跋:[坂]昌成(箕田徠山筆) 印記:「快馬度刀水」(渡辺金造)

[88@220@5]



北村湖春(きたむらこしゆん・1648～1697)が『大鏡』『小鏡』等を踏まえつつ改訂を加えて編み出した、近世期を代表する源氏梗概書で、源氏入門書としても評価の高いものである。湖春は、歌人・俳人にして古典学者であった季吟(きぎん)の長男で、父の学を良く受け継ぎ、元禄2年(1689)に父と共に幕府に歌学方として召し抱えられた。53才にして父に先立って没しており、本作は唯一の著作にして代表作となった。成立は元禄元年であるが、長らく写本のままで広まり、幕末にいたって漸く幕府奥儒者であった成島司直(なるしまもとなお・1778～1862)らの手で刊行され、天保8年版の存在も報告されている。

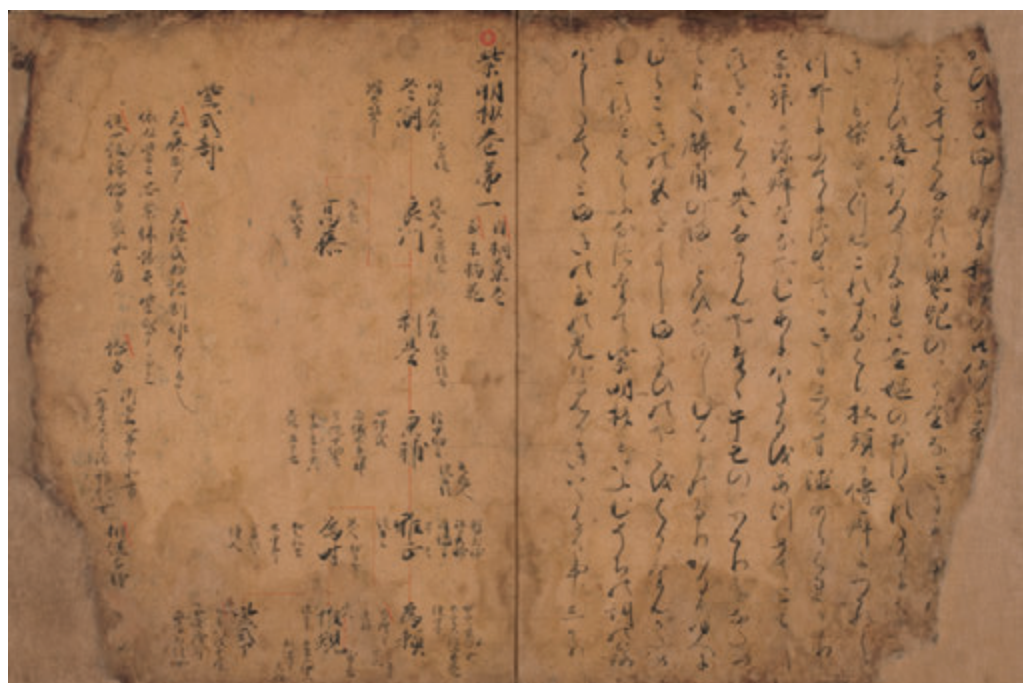
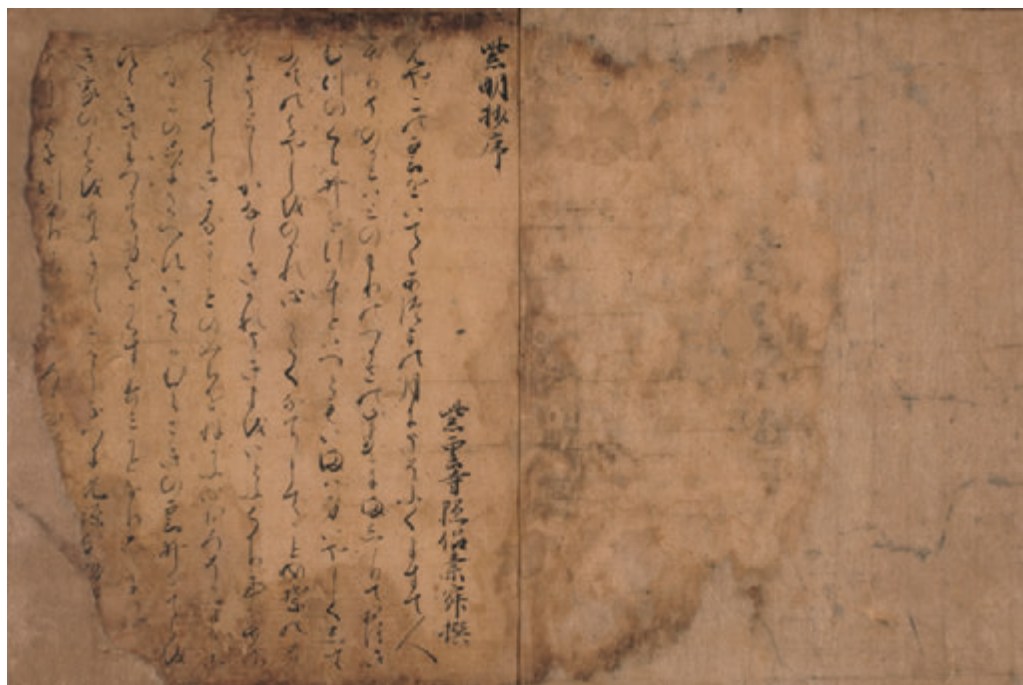
表紙は江戸前期頃の版本のものとは色もデザインも全く異なっており、表紙にも流行があったことが判る。この色や忍草文は、ベストセラーであった文化9年(1812)刊の加藤千蔭『万葉集略解』の表紙の色と文様(蔓若松文散し)を連想させるものがある。同版本は多く、金兎堂の刊記のあるものや、金花堂蔵板目録のあるものなどあるが、本書には何もなく刷の早い物と思われ、保存状態も良好である。陸軍中將であった大蔵書家渡辺金造(1874～1965)の旧蔵。

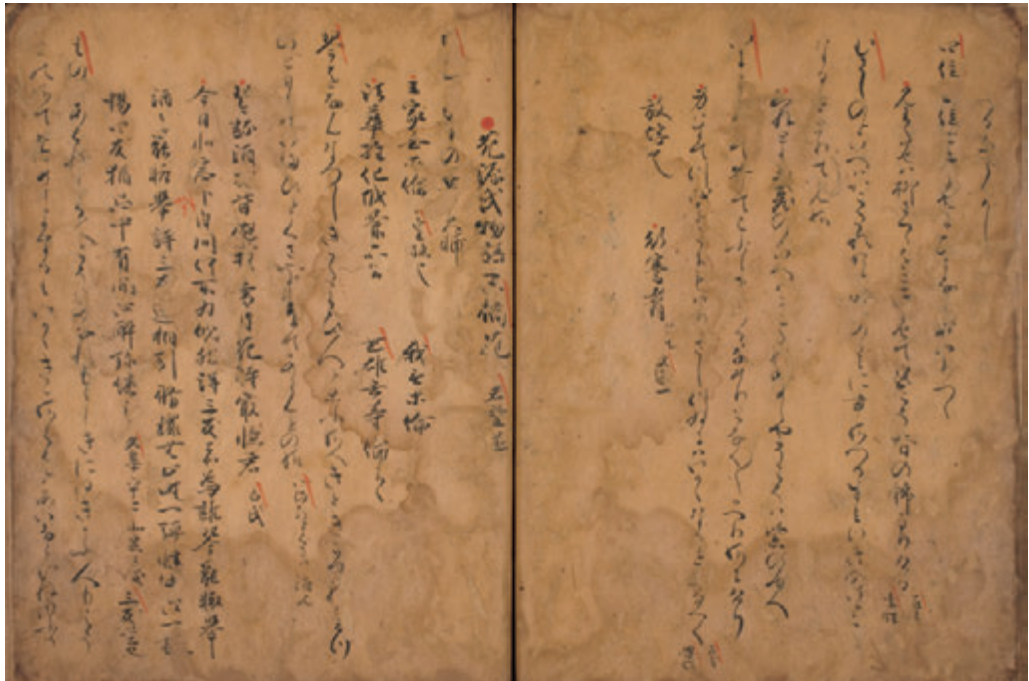
【参考文献】中西健治編著『源氏物語忍草の研究』(和泉書院、2011)

28. 紫明抄 10卷存卷1 素寂著 [鎌倉末] 写 綴葉装改装結び綴 1帖

本文共紙表紙(28.5×21.9cm)内題「紫明抄序 紫雲寺隱侶素寂撰」・「紫明抄卷第一〈自桐壺卷／至末摘花〉」料紙黄檗染楮紙 半葉12行・字高約25.5cm 朱合点・声点・星・片仮名ルビ等 新しい杉箱 伝岡本清茂旧蔵

[132X@102@1]





『紫明抄』は「河内本」を完成させた親行の弟素寂（そじゃく）の編になる源氏注釈書で、世尊寺伊行『源氏釈』や藤原定家『奥入』、光行・親行父子の『水原抄』（散佚）等の先行注を取り込みつつ、問答形式で記されており、本格的な源氏注釈としては現存最古のものである。

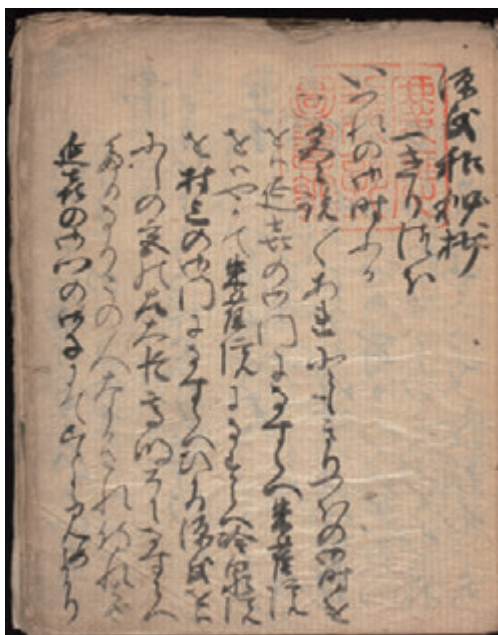
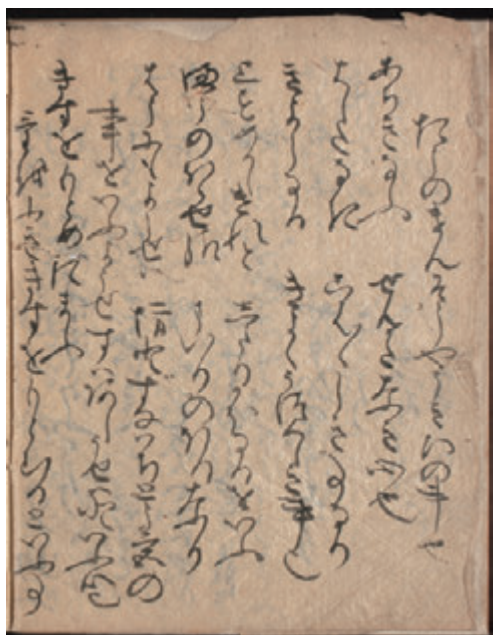
本書は「末摘花」までの残欠であるが、永仁2年（1294）の鎌倉8代將軍久明親王への献上から程経ない頃の写本として貴重である。汚損の為に3辺を化粧裁ちして補修改装されており、本来はより大きな本であったと思われる。30cmはあったと思われる特異な大きさは、尾州家河内本源氏物語（32.0×25.5cm）、九州国立博物館蔵『栄花物語』前半10帖（30.6×24.2cm）等の金沢文庫との関係が想定される本に近く、また栄花とは料紙の色も共通しており、本書も金沢文庫周辺で書写された可能性がある。本文は南北朝期写とされる完本の京都大学国文学研究室蔵本に近似するが、巻第編成や叙述形態に異なるところがある。箱中に賀茂社家の岡本清茂の旧蔵と伝える紙片がある。

【参考文献】平澤五郎「慶應義塾図書館蔵〔鎌倉末南北朝〕写『紫明抄』存巻一零本：解題篇（一）」（『斯道文庫論集』30、1995）

29. 源氏和秘抄 一条兼良著 [室町後期] 写 折紙綴葉装 有欠1帖

後補薄茶色保護表紙・原表紙本文共紙（16.7×13.7cm）外題原表紙左肩打付「和秘抄全」（本文同筆）内題「源氏和秘抄」料紙簀目の目立つ椿打紙 半葉9～10行・字高約15.1cm 印記：「加持井御文庫」（梶井宮家）・「刀水書屋」（渡辺金造）

[128@149@1]



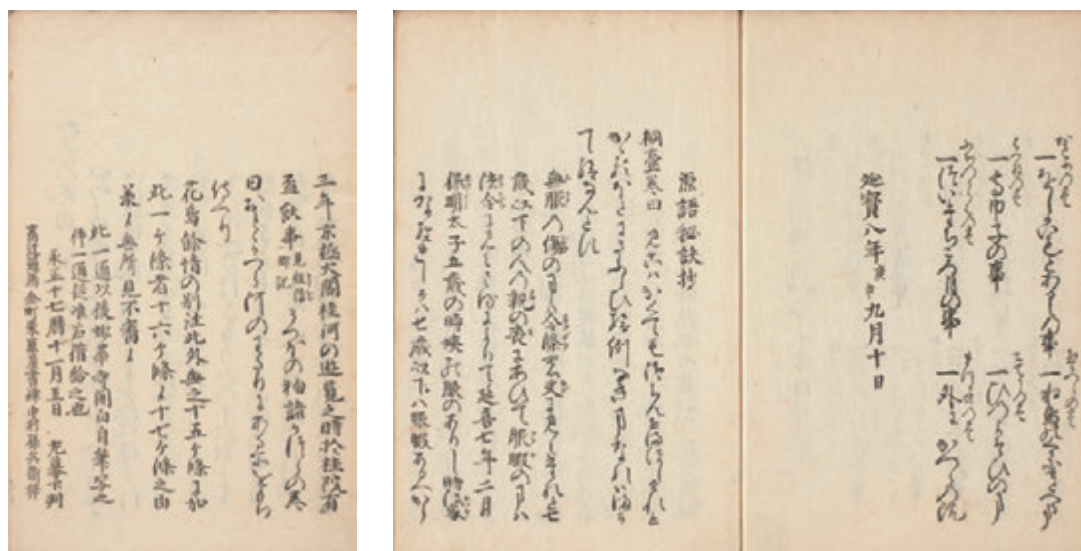
連歌師の使用が目立つ、薄手の料紙を一度折ってから用いる折紙綴葉装の写本で、後半部を欠き、綴じ誤りによる錯簡もあるが、「ほたる」巻途中までの残存本文に欠脱はない。

『源氏和秘抄』は、関白にして時代を代表する古典学者でもあった、一条兼良（いちじょうかねら・1402～1481）の源氏注釈書で、本書では欠く宝徳元年（1449）11月15日の自跋には、『河海抄』・『水原抄』・『紫明抄』などの注釈書は詳細で利用が難しいので、難解な語句に簡単な注解を付して初心者の入門書としたとある。実際「もゝしき 大内をいふ」・「みこ 親王をいふ」等とあり、その初学性が理解できる。兼良が後年に著した大部な『花鳥余情』や、その対になる秘伝書『源語秘訣』ほどには普及しなかったが、伝本は数十を数える。注釈項目に出入りがあって総合的な本文研究が必要であるが、書写の古い本書は有欠本ながら重要な存在である。義塾図書館には、享禄2年（1529）の「従三位藤」と寛永21年（1644）の本奥書を有する朝吹英二旧蔵 [江戸前期] 写本 [133@64@1] も所蔵されている。梶井宮大原三千院と渡辺金造の旧蔵。

30. 源語秘訣抄 〈源語秘訣〉 一条兼良著 京・中村孫兵衛 延宝8年(1680)序刊 五つ目綴 1冊

縹色表紙(27.3×18.2cm)中央刷題簽 外題「源語秘訣鈔全」 目録題「源氏物語之内秘事十五ヶ條」 内題「源語秘訣抄」 無辺無界・半葉9行・印面19.2×14.1cm 印記:「春琴」(墨陰)

[231@20@1]



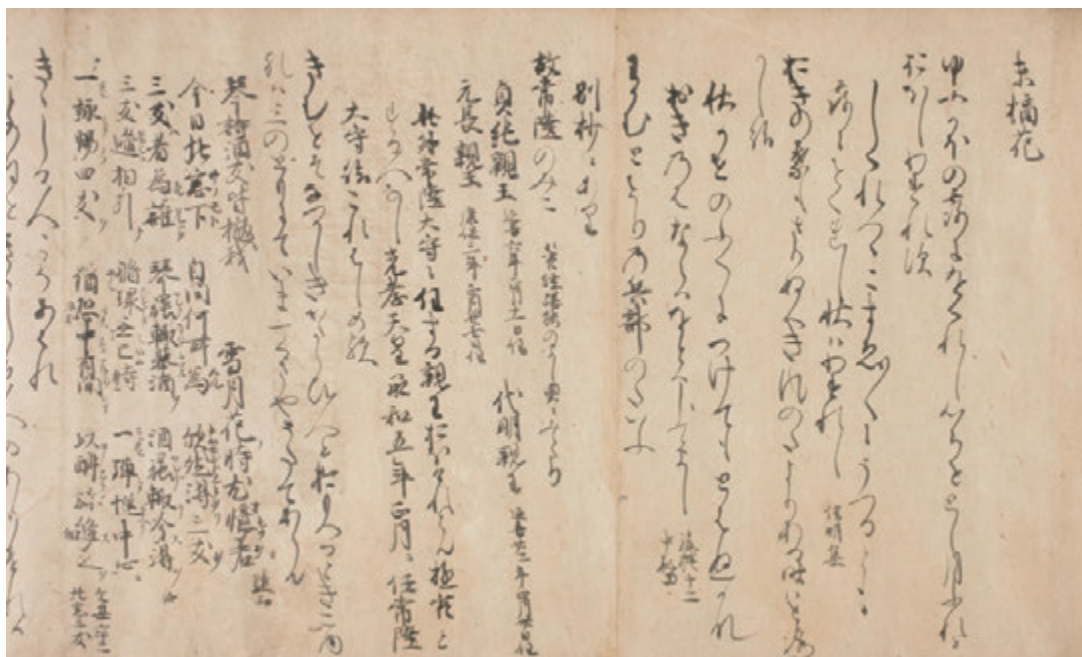
『源語秘訣抄』は、一条兼良が文明4年(1472)の『花鳥余情』に書かなかった秘事を、息冬良に伝える為に文明9年に纏めたもので、「源氏十五箇奥義」・「源私抄」・「源氏不審抄」等様々な名称があり、正式名はなかったものと考えられる。「唯伝一子之」で始まる兼良奥書は、「中納言中将」(冬良)宛で文明9年の年紀を記すものと、宛先も年紀もないものがあり、これにより2種に分類することができる。相当に流布し写本も数多い。

版本は宛名のない兼良奥書を有する系統で、その他明応6年(1497)「前槐」、永正17年(1520)「左幕下」(徳大寺公胤)の本奥書がある。末尾には「高辻通雁金町永原屋書肆中村孫兵衛梓」と書肆名しかなく、年紀は目録末に「延宝八年(庚申)九月十日」とあるのは、最終丁に余白が無かった為と思われる。刊年不明とされるものはこの年紀を見落とした可能性がある。題簽も本文も定家を思わせる書風で、刊記の状況と共に愛嬌を感じさせる本である。刷り保存共に良く、延宝版本の見本となるものであろう。

31. [源氏物語古注] 存末摘花 伝[浄弁]筆 [南北朝] 写 綴葉装改装卷子装 1軸

後補銀鼠色地に桃飛雲文緞子表紙 (25.8×24.0cm) 題簽なし 見返し布目金紙 内題「末摘花」 料紙楮打紙 原装時半葉13~14行・字高約23.2cm 古い桐箱 吉澤義則旧蔵

[132X@130@1]



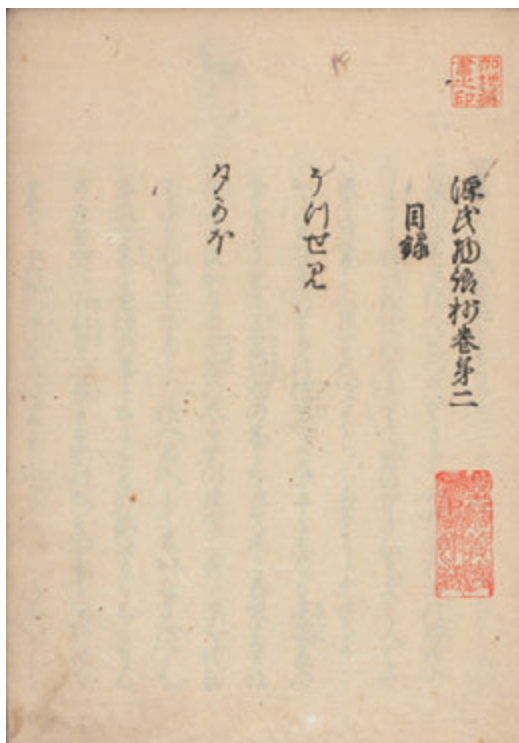
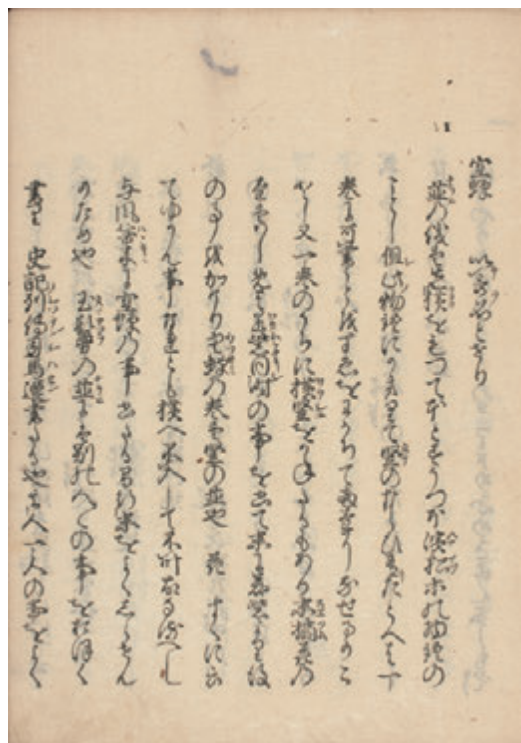
現状は卷子装であるが、料紙の継目が多く、元は約26×22cm程度の冊子本であったことが判る。先行する藤原伊行の『源氏釈』・藤原定家の『奥入』や河内方の『異本紫明抄』等を始め、和漢仏の多くの典籍を引用して、源氏本文の語句の解釈や典拠の指摘等を行った注釈書である。摘出された源氏本文は定家本の特徴を示しており、同本を用いた本格的注釈として現存最古のものである。「末摘花」だけで27紙があり、完存していれば大部なものであったはずであるが、僚巻は東京国立博物館に蔵される、同筆でやはり卷子に改装された「若紫」1軸が知られるのみである。東博本の外題や箱書には浄弁筆とある。真筆とは認めがたいが、定家曾孫の二条為世門の四天王に数えられた浄弁を充てているのは、本文系統との関係からも興味深い。『未完国文古注釈大系11』の解題により、京都大学教授にして筆跡鑑定も行っていた吉澤義則の旧蔵本であることが判る。

【参考文献】川上新一郎「伝浄弁筆源氏物語古注 翻刻と解題」(『斯道文庫論集』40、2005)

32. 源氏物語抄 20巻 里村紹巴著 [江戸初前期] 刊 20冊

栗皮表紙 (27.3×20.5cm) 題簽なし 目録題「源氏物語抄巻第一 (～二十)」 無辺無界・半葉11行・印面19.4×17.8cm 第1冊のみ朱引・ルビ等あり 印記:「加地藏書之印」・「藏書者加地源式郎印」

[231@28@20]



連歌師の里村紹巴（さとむらじょうは・1525頃～1602）が、永禄6年（1563）に三条西公条（さんじょうにしきんえだ・1487～1563）より受けた源氏講釈の内容を、同8年にまとめたもの。「紹巴抄」・「源流臨江抄」・「源氏物語称名院抄」等の著者や講釈者に由来するものの他にも、様々な外題が付されているのは、本来の「源氏物語抄」では他注との識別が難しい為であろう。写本も少ないが、源氏注として唯一古活字版が存している。

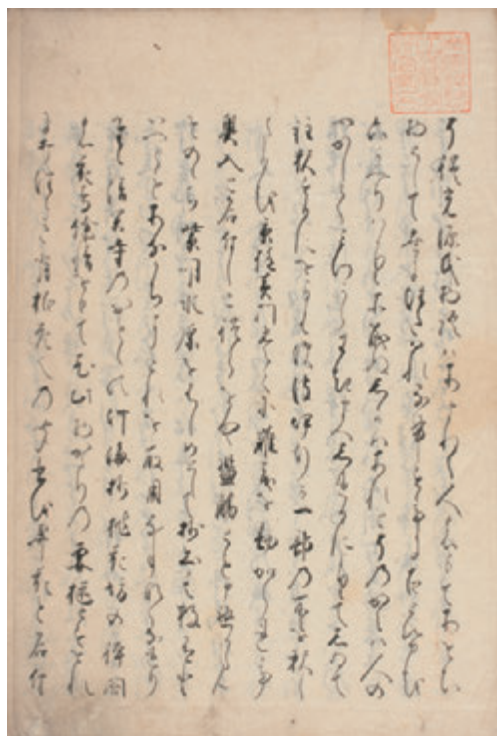
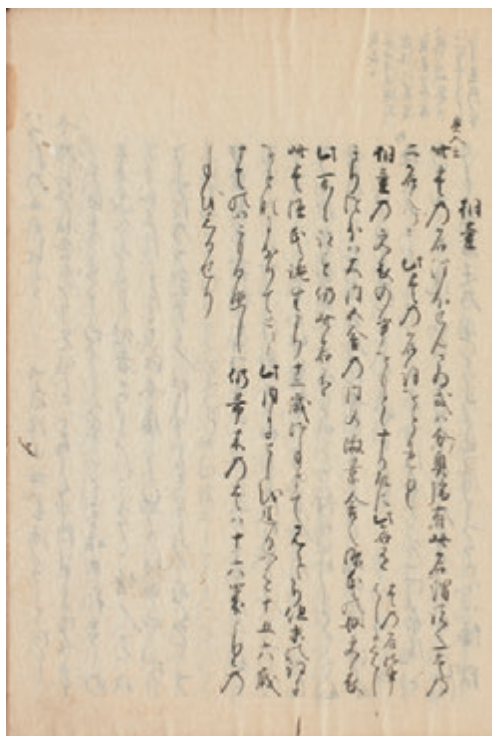
本書は大ぶりで外題のない栗皮表紙を有しており、巻頭目録部分も古活字版かと錯覚しそうになる。しかし本文部分に片仮名ルビや返点等が刻されていることから、整版であると判断できる。そう思うってしまうのも寛永頃刊の古活字版を覆刻（被彫）した故であるが、古活字版は半葉10行であるのに対し、この整版は11行と異なっている。毎半葉行数を増やしながら版下を作成しているのであるが、そうした理由は不明である。古活字版と整版の交代期の状況を考察する上でも貴重な事例と考えられる。本書は刷りも保存も良く、整版本の見本となるものであろう。

【参考文献】妹尾好信『『源氏物語抄（紹巴抄）』の古活字本と製^{ママ}版本』（『広島大学大学院文学研究科論集』64、2004・12）

33. 岷江入楚 55巻 中院通勝著 [江戸前期] 写 55冊

萌葱色表紙 (27.8×20.0cm) 中央打付外題「桐壺 一」等各巻名と巻数(後筆) 半葉12行・字高約21.6cm 上部に不審箇所を記した小紙片貼付 印記:「よこ山」(横山重)

[JL@2A@25@55]



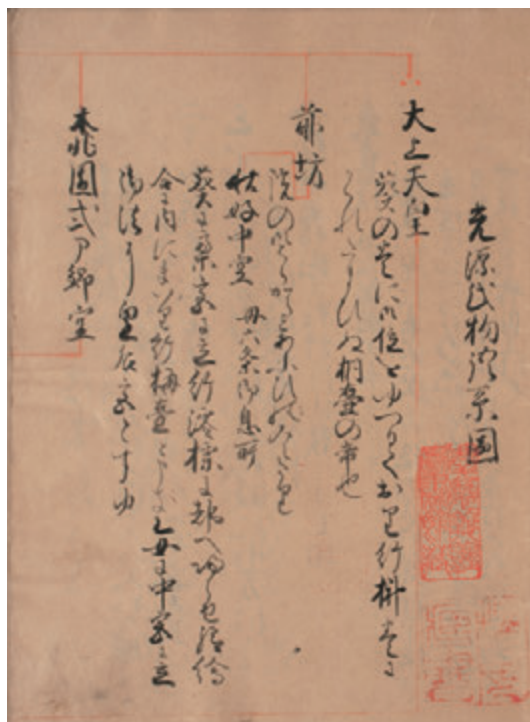
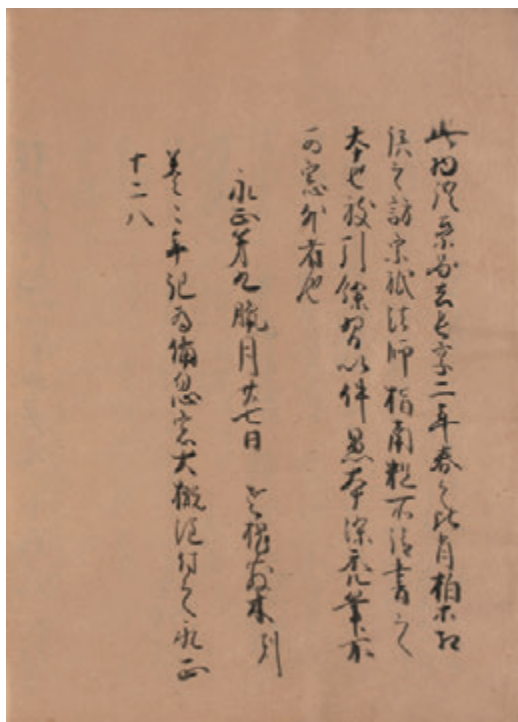
中院通勝(なかのいんみちかつ・1556~1610)が細川幽斎(ほそかわゆうさい・1534~1610)の要請を受けて編纂し、慶長3年(1598)に完成させた注釈書で、幽斎命名の書名「岷江入楚(みんごうにっそ)」は、揚子江源流の岷江が下流の楚で大河となることに因むもので、既存の諸注を集成し大成させたことを意味する。物語本文を有さない注釈として最も大部なものであり、巻数が多いこともあってか江戸時代には刊行されずに終わったが、京都大学中院文庫の自筆残欠本を初めてして大量の写本が現存しており、評価の高さが窺われる。

本書は、外題は殴り書きのようで第一印象が悪いが、本文の筆跡は優美であり、27cmを越える大きさや料紙の質からしても、素性の良い本であることは疑いない。奥書や蔵書印はないが、しかるべき公家か大名家などで書写された可能性は高い。義塾出身の大蔵書家横山重の旧蔵本である。

34. 光源氏物語系図 三条西実隆編 [江戸前期] 写 綴葉装 1帖

薄縹色地金銀泥土坡桜樹（表）秋草月（裏）文表紙（24.9×17.8cm）外題左肩打付「光源氏ものかたり系図」（本文同筆力）見返し布目鳥の子地金銀小切箔散し 内題「光源氏物語系図」料紙鳥の子 半葉10～12行・字高約22.4cm（含系線）朱線・星・合点 印記：「三井家」（三井高辰）・他1顆

[231@12@1]



『源氏物語』には500名以上が登場するので、理解の手助けとして、登場人物とその血縁関係を整理した『源氏物語系図』が制作された。現存伝本から見て鎌倉前期までに成立していたのは確かである。鎌倉時代にも複数の系統があったが、それらの問題点を整理して改訂版を作成したのが、室町期を代表する古典学者の三条西実隆である。実隆は長享2年（1488）・明応8年（1499）・文亀4年（1504）・永正9年（1512）・同17年（1520）と度々手入れを行っており、配列法を改めた文亀4年本が最も流布している。実隆系図は影響力が大きかったので、これ以前のものを「古系図」、実隆のものを「新系図」と呼び習わしている。

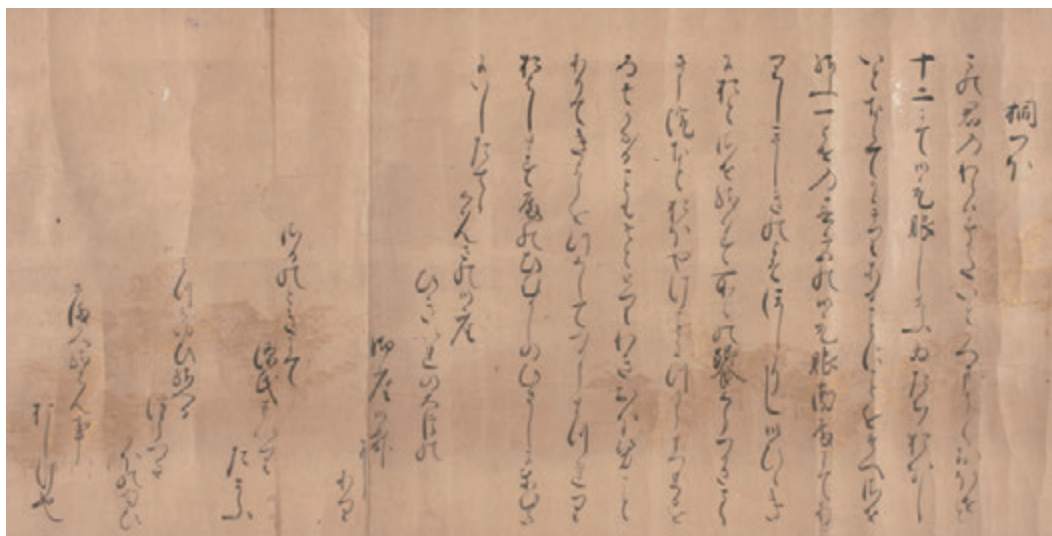
本書は、実隆の文亀4年本に僅かに手を加えた永正9年本に属する伝本で、能書として名高い烏丸光広（からすまみつひろ・1579～1638）に似た筆跡で写されている。装訂や表紙の様子からして、源氏本文とセットで制作された可能性もあろう。豪商三井一族の一家新町家の幕末明治期当主高辰の旧蔵。

【参考文献】伊井春樹『源氏物語注釈史の研究：室町前期』（桜楓社、1980）

35. 絵源氏 6巻欠巻5 [江戸前期] 写 卷子装 5軸

紺地金泥草木雲霞文表紙（高さ31.6cm）丹色地金泥雲霞文題簽 外題「絵源氏第一（～四・六）」（本文同筆力） 内題「桐つほ」等巻名 見返し布目金紙 後補紫組紐 菊花文彫金真鍮軸頭 料紙金泥下絵入鳥の子・紙背雲母刷 字高約26.5cm 金銀泥彩色画（49図） 二重箱内箱蓋表書「源氏画卷物」

[132X@189@5]



（桐壺）

本書は絵巻形態であるが、詞書はストーリーを追うものではなく、各巻の一節の抜き書きであり、室町後半頃から流行した、本文の抜粋とその場面の絵をセットにして色紙で作成する画帖を、卷子装の形にしたものと言える。源氏の各巻毎に、料紙1枚ずつの詞と絵をセットにして、巻順に継いでいる。色紙帖では詞書を寄合書とすることが多いが、これは全巻1筆である。料紙は約32×53cm



(若紫)



(少女)

もあるので絵も色紙よりも幅と奥行のあるものになっており、画帖と絵巻の折衷的性格が際立っている。絵は全体的に色が淡く、岩佐又兵衛風の下ぶくれの顔立ちが特徴的であり、天皇の面貌も憚らずに描くなど、通常の源氏絵類とはやや異質である。場面も「桐壺」は高麗の相人との対面を描くことが多いが、本絵巻は元服場面となっているなど、色紙帖との異なりが目立つ。外題を含め他に類例を見ず、美術史的な位置付けなど今後の研究が必要であろう。第5巻(横笛至橋姫)を欠く為、第6軸外題の「六」字には、「五」と読めるようにする足し墨がなされている。

36. 源氏物語〔抄出〕2巻 〔江戸前期〕写 〔居初つな〕筆画 綴葉装 特小奈良 絵本 2帖

鳥の子色地水浅黄色七宝繫文雲母刷金小切箔散し表紙（6.0×4.6cm） 中央素紙題簽 外題「けんし物語上（下）」（本文同筆）見返し魚鱗文空押し銀紙 内題「きりつほ」（等抄出巻名）料紙楮打紙 半葉6行・字面高さ約4.6cm 金銀泥彩色画（6図）

[132X@195@2]
（絵入り本プロジェクト）



（浮舟）



（花宴）

室町後期から江戸時代前期に流行した「奈良絵本」に属する写本だが、これだけ小さいものは珍しい。上帖は「きりつほ・夕かほ・若紫・花のえん・すま」、下帖は「橋姫・あけまき・さわらひ・うき船・かけろふ」から僅かな文章を抄出し、各帖3図の可憐な挿絵を添えたものである。読むのではなく、人形の飾りとする為の「雛本」に属するものか。図版はほぼ現寸大である。

本文も挿絵も、近時存在が明らかになった女流奈良絵本作者の居初（いそめ）つなの手になることが明らかにされており、本書の表紙の芯紙が『伊勢物語』の反故であること、同装同筆の『徒然草』2帖が存在していることも報告されている。

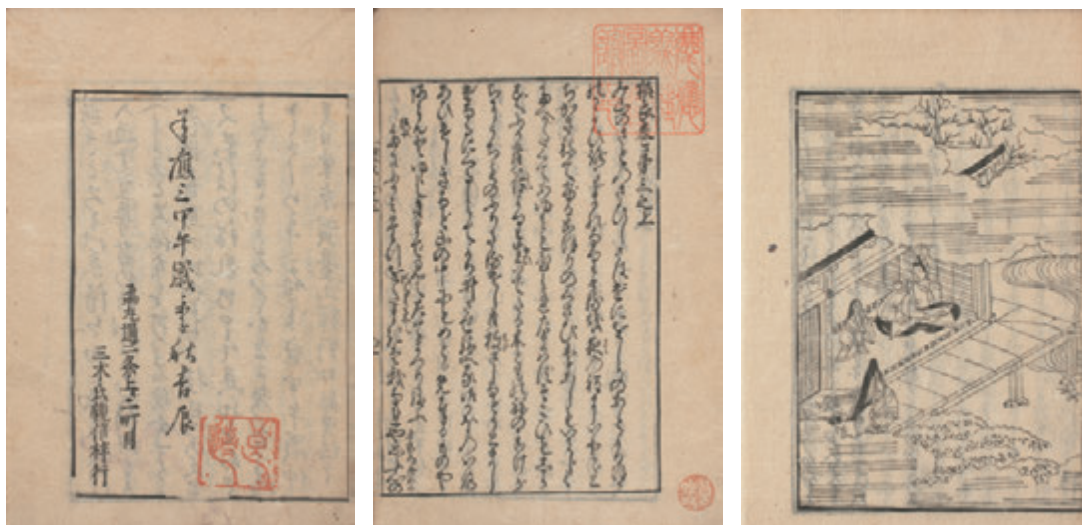
本書は、公家の三条西家の分家押小路の出である玄長（はるなが）を祖とする徳川幕府高家の前田家に伝来したもので、5代将軍綱吉より拝領との伝承を有しており、書誌学的のみならず文化史的にも価値が高い。

【参考文献】石川透「絵本・絵巻研究の可能性」（『中世の物語と絵画』竹林舎、2013）

37. 狭衣 4巻 附：狭衣下紐4巻・狭衣系図 切臨編（目録）紹巴編（下紐）〔三条西実隆〕編（系図）京・三木親信 承応3年（1654）刊後印 絵入 7冊

薄縹色地龍丸唐草文空押表紙（22.0×15.6cm）中央淡彩雲文金小切箔散し題簽 外題墨書「さころも 一（～六、下ひも）」 目録題「狭衣目録並年序」 内題「狭衣巻第一之上（下）（二之上（下）・三之上（中・下）・四之上（中・下）」・「狭衣下紐第一（～四）」・「狭衣系図」 尾題「狭衣目録終」・「狭衣巻第一之上（下）（二之上（下）・三之上（中・下）・四之上（中・下）」終」・「狭衣下紐第一（～四）終」 四周単辺（17.0×11.5cm）・半葉11行 印記：「良哉」・「良邊」

[150@188@7]



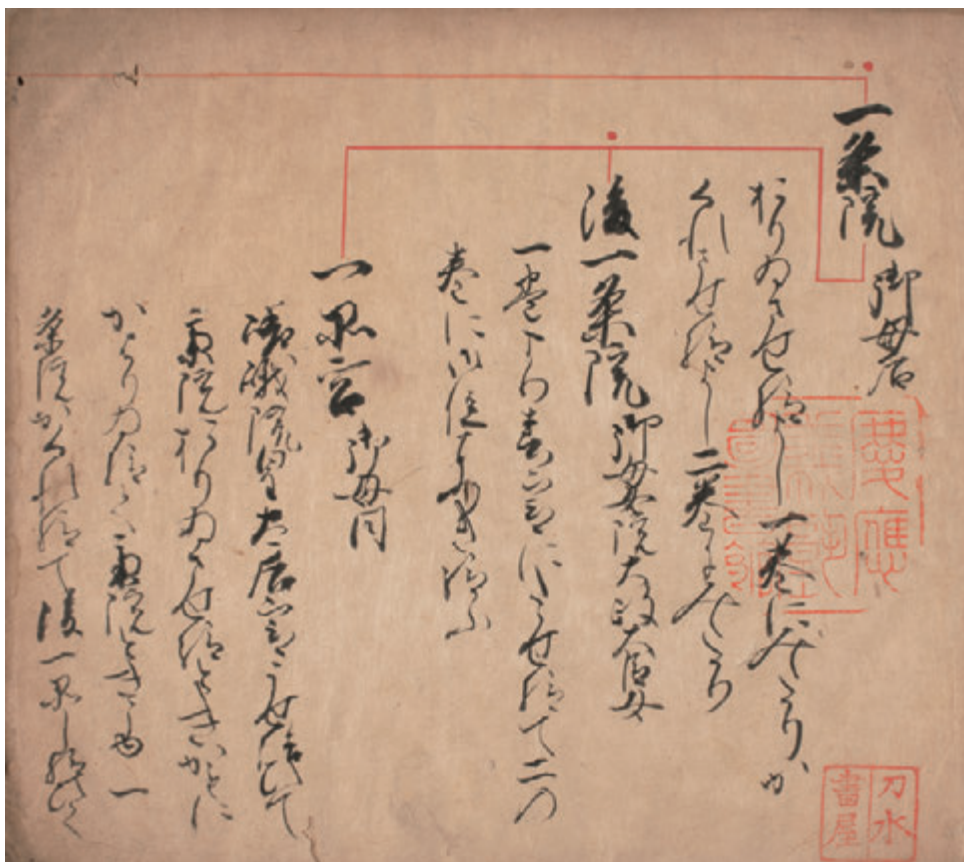
伊勢・源氏に続いて写本が多い物語が、やはり歌人の必読書であった『狭衣物語』で、古活字版でも4種が確認されている。本書は整版最初のもので、本文部分には挿絵があり、承応3年6月切臨序のある目録、天正19年（1591）紹巴の本奥書を有する注釈『狭衣下紐』と、承応3年5月の切臨の校合奥書のある『狭衣系図』とでセットとなっている。刊記に「承応三甲午歳季秋吉辰／鳥丸通二条上ル二町目／三木氏親信梓行」とあり、序と3月しか隔たらないので、全体の編者は時衆僧で古典学者でもあった一華堂切臨（いっかどうせつりん・1591～1662）であると思われる。挿絵や注・系図を加えたのは、慶安3年（1650）版「絵入源氏」の影響であろうが、「絵入源氏」にはない半紙本サイズとしている。本来16冊仕立てのものだが、本書は7冊に纏められている。

【参考文献】川崎佐知子『『狭衣物語』 享受史論究』（思文閣出版、2010）

38. さ衣系図 [三条西実隆] 著 [江戸初期] 写 折本 1帖

墨色地金銀泥松樹雲霞文表紙(18.3×20.3cm) 左肩丹色地金泥草花文題簽 外題「さ衣系図」
(本文同筆) 料紙鳥の子 半葉12行前後・字高約14.5cm 印記:「刀水書屋」(渡辺金造)

[128@112@1]



『狭衣系図』は『源氏系図』の影響を受けて制作されたと考えられ、源氏系図の大成者である三条西実隆作であると、承応3年(1654)版狭衣付載の系図にある[一華堂]切臨の校合奥書に記されるが、確証はない。現存伝本は2系統に分けられており、版本は第2類に切臨が「私」として注記の増補を行ったものであるのに対し、本書は第1類に属するものである。後一条院の子に「姫宮」が見えないのは、東海大学桃園文庫蔵3本中の1本と本書のみであり、初稿の姿を伝える可能性もある。表紙の有り様からすると、物語本文と共に作成されたものである可能性が高い。狭衣系図は室町期の成立と考えられてきたが、山口県文書館山田家文書中の異本は鎌倉期の写本であり、成立時期と両者の関係についての再検討が必要である。

【参考文献】川崎佐知子『『狭衣物語』享受史論究』(思文閣出版、2010)

表紙一覧



1. 風葉と哥集



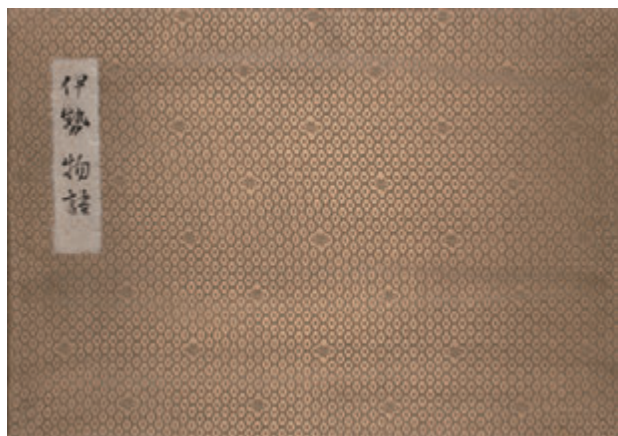
2. 古物語目録



4. 伊勢物語



5. 伊勢物語



7. 伊勢物語画帖



8. 大和物語



9. 大和物語



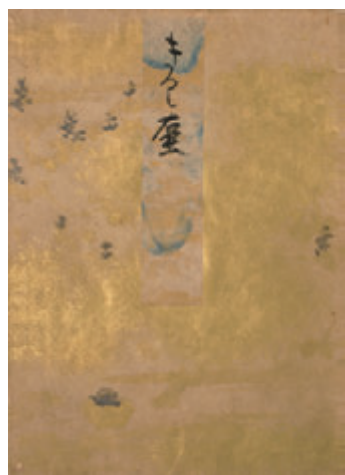
10. 宝物集



11. 後拾遺和歌抄



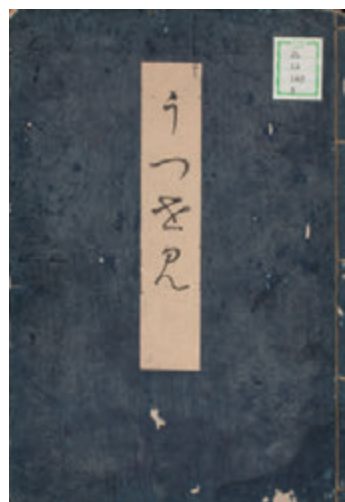
12. 小倉山百人一首



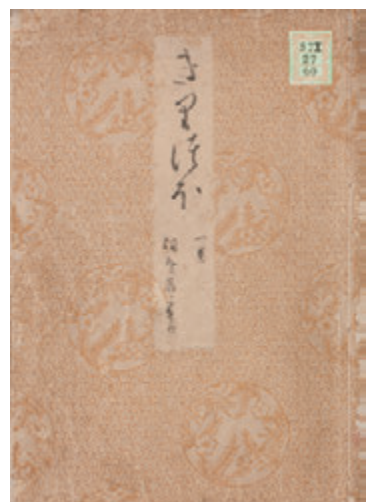
13. 源氏物語



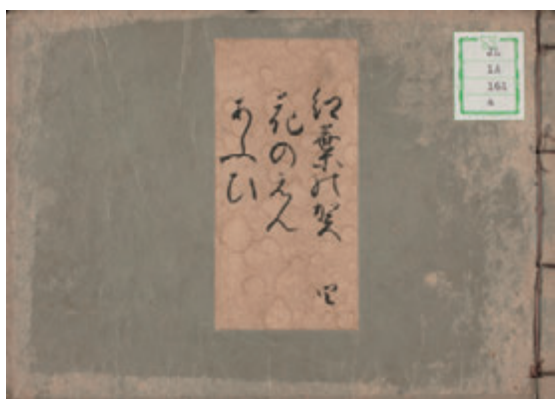
16. 源氏物語



19. 源氏物語



20. 源氏物語



21. 源氏物語



22. 源氏物語



23. 源氏袖鏡



24. 三帖源氏



25. 源氏物語大略



26. 源氏ます鏡



27. 源語忍草



28. 紫明抄



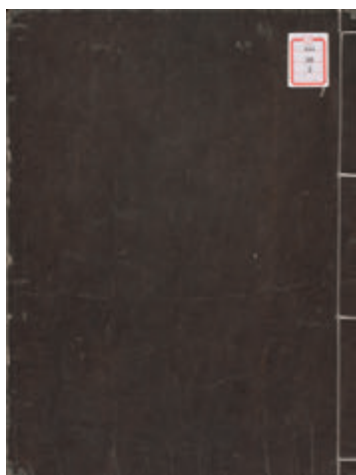
29. 源氏和秘抄



30. 源語秘訣抄



31. [源氏物語古注]



32. 源氏物語抄



33. 岷江入楚



34. 光源氏物語系図



35. 絵源氏



36. 源氏物語 [抄出]



37. 狭衣



38. さ衣系図

出品リスト

展示番号

資料名

1. 風葉和哥集 20巻存巻11 伝池田綱政筆 [江戸前期] 写 1冊
2. 古物語目録 清水浜臣自筆稿本 [江戸後期] 写 1冊
3. 竹取物語屏風 [江戸前期] 写 絵巻断簡貼込 6曲1双
4. 伊勢物語 伝飛鳥井雅康筆 [室町中期] 写 綴葉装 1帖
5. 伊勢物語 2巻 正徳2年(1712) 写 2冊
6. 伊勢物語小絵巻断簡 [江戸前期] 写 84紙
7. 伊勢物語面帖 伝里村昌陸筆・伝長谷川等哲画 [江戸前期] 写 文政4年(1821) 識語 袋綴改装折帖 1帖
8. 大和物語 (前半) [江戸前期]・(後半) 天文17年(1548) 宗伝写 合1冊
9. 大和物語 2巻 [近世初] 写 2冊
10. 宝物集 3巻 平康頼著 [寛永] 刊 古活字 3冊
11. 後拾遺和歌抄 20巻存序巻1~4 藤原通俊撰 [鎌倉中期] 写 綴葉装 1帖
12. 小倉山百人一首 [藤原定家] 撰 [江戸前期] 写 奈良絵本 1冊
13. 源氏物語 54巻 [江戸初前期] 写 綴葉装 54帖
14. 源氏物語「薄雲」断簡 伝藤原光経筆 [鎌倉中朝] 写 1葉
15. 源氏物語「空蟬」断簡 [鎌倉中期] 写 1葉
16. 源氏物語「末摘花」 伝後京極良経筆 [鎌倉中期] 写 綴葉装 1帖
17. 源氏物語「夕顔」断簡 [鎌倉後期] 写 1葉
18. 源氏物語「宿木」断簡 伝藤原俊成筆 [鎌倉前期] 写 掛軸1幅
19. 源氏物語 54巻欠夕顔 [寛永正保頃(1624~1648)] 刊やや後印 53冊
20. 源氏物語 54巻附：山路の露・目案3巻・系図・引哥 山 [本] 春正編 京・八尾勘兵衛 承応3年(1654) 刊後印 絵入 60冊
21. 源氏物語 54巻附：山路の露・系図・引歌・表白 欠：第24冊(浮舟・蜻蛉)・目案 [京]・林和泉掾 [出雲寺和泉掾] 万治3年(1660) 刊後印 絵入横本 26冊
22. 源氏物語 54巻附：山路の露・系図・引哥 欠：爪印3冊 [江戸前期] 刊 絵入小本 27冊
23. 源氏袖鏡 3巻〈源氏大鏡〉 [江戸初期] 写 3冊
24. 三帖源氏 3巻存巻下〈源氏大鏡〉 [江戸前期] 写 綴葉装 1帖
25. 源氏物語大略 12巻〈十二源氏袖鏡〉 [京]・中野道也 明暦2年(1656) 刊 12冊
26. 源氏ます鏡 3巻 [宗祇] 編 [京]・三河屋太郎助 [京]・古本屋勝兵衛尉 寛文11年(1671) 刊 絵入 5冊
27. 源語忍草 5巻 北村湖春著 天保5年(1834) 序刊 5冊
28. 紫明抄 10巻存巻1 素寂著 [鎌倉末] 写 綴葉装改装結び綴 1帖
29. 源氏和秘抄 一条兼良著 [室町後期] 写 折紙綴葉装 有欠1帖
30. 源語秘訣抄〈源語秘訣〉 一条兼良著 京・中村孫兵衛 延宝8年(1680) 序刊 1冊
31. [源氏物語古注] 存末摘花 伝 [浄弁] 筆 [南北朝] 写 綴葉装改装卷子装 1軸
32. 源氏物語抄 20巻 里村紹巴著 [江戸初前期] 刊 20冊

- 33. 岷江入楚 55巻 中院通勝著 [江戸前期] 写 55冊
- 34. 光源氏物語系図 三条西実隆編 [江戸前期] 写 綴葉装 1帖
- 35. 絵源氏 6巻欠巻5 [江戸前期] 写 卷子装 5軸
- 36. 源氏物語 [抄出] 2巻 [江戸前期] 写 [居初つな] 筆画 綴葉装 特小奈良絵本 2帖
- 37. 狭衣 4巻附：狭衣下紐4巻・狭衣系図 切臨編（目録）紹巴編（下紐）[三条西実隆] 編（系図）京・三木親信 承応3年（1654）刊後印 絵入 7冊
- 38. さ衣系図 [三条西実隆] 著 [江戸初期] 写 折本 1帖

第26回慶應義塾図書館貴重書展示会

慶應義塾の王朝物語 源氏物語を中心として

2014年10月発行

監修／展示図録執筆 佐々木孝浩

編集・発行 慶應義塾図書館

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

Tel 03-5427-1625

印刷・製本 昭和情報プロセス㈱

